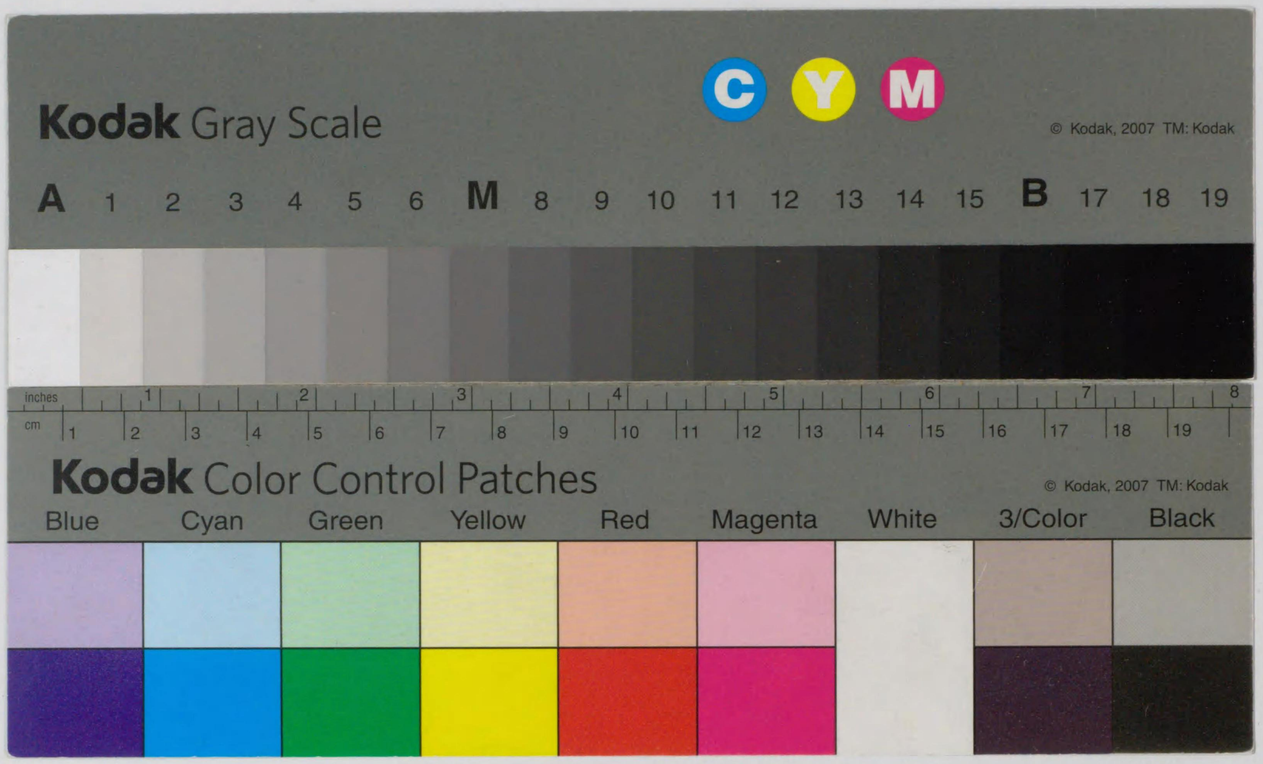


658
159
658–159
12005015719774

440

醫家先哲肖像集

刀江書院刊

醫家先哲肖像集

醫學博士　藤浪剛一　著

刀江書院刊

648-159

謹みて醫學博士・文學博士
富士川游先生の坐右に本
書を捧呈す

醫家先哲肖像集

目次

一　序文　一
一　圖像　一

奈良平安時代

第一僧　行基　一—二六
第二僧　觀勒　二七（上は說明下は圖）
第三僧　鑒眞　二八—二九頁

藤原時代

第四丹波康頼　三一—三〇
第五丹波康頼（別圖）　三二—三三

三五—三四
三六—三七

第六　丹波雅忠　三九—三八
第七　出雲廣貞　四〇—四一

鎌倉足利織豐時代

第八　僧　忍性　四三—四二
第九　越後丹介　四四—四五
第十　安藝守定　四七—四六
第十一　田代三喜　四八—四九
第十二　曾谷慶裕　五一—五〇
第十三　曲直瀨道三　五二—五三
第十四　施藥院全宗　五五—五四
第十五　曲直瀨正琳　五六—五七
第十六　曲直瀨正純　五九—五八
第十七　御園意齋　六〇—六一

德川時代

第十八　曲直瀨玄朔　六二—六三
第十九　堀杏庵　六四—六五
第二十　岡本玄冶　六七—六六
第二十一　施藥院宗伯　六八—六九
第二十二　野間三竹　七一—七〇
第二十三　戴曼公　七二—七三
第二十四　向井靈蘭　七五—七四
第二十五　山脇玄心　七六—七七
第二十六　井上玄徹　七九—七八
第二十七　井上玄徹（木像）　八〇—八一
第二十八　今大路玄淵　八三—八二
第二十九　嵐山甫安　八四—八五
第三十　杉山和一　八七—八六

第三十一　本木良意　八八—八九
第三十二　鳩野宗巴(初代)　九一—九〇
第三十三　松下見林　九二—九三
第三十四　楢林鎮山　九五—九四
第三十五　寺井玄渓　九六—九七
第三十六　吉田自庵　九九—九八
第三十七　貝原益軒　一〇一—一〇〇
第三十八　稲生若水　一〇三—一〇二
第三十九　越智平庵　一〇四—一〇五
第四十　山脇玄脩　一〇六—一〇七
第四十一　後藤艮山　一〇八—一〇九
第四十二　香月牛山　一一一—一一〇
第四十三　松岡恕庵　一一三—一一二
第四十四　香川修庵　一一五—一一四
第四十五　野呂元丈　一一七—一一六

第四十六　奥村良竹　一一九—一一八
第四十七　山脇東洋　一二一—一二〇
第四十八　井上稚川　一二三—一二二
第四十九　御園中渠　一二五—一二四
第五十　青木昆陽　一二七—一二六
第五十一　吉益東洞　一二九—一二八
第五十二　賀川玄悦　一三一—一三〇
第五十三　賀川玄迪　一三三—一三二
第五十四　平賀源内　一三五—一三四
第五十五　瀬丘長圭　一三七—一三六
第五十六　山科厚安　一三九—一三八
第五十七　惠美三白　一四一—一四〇
第五十八　建部清庵　一四三—一四二
第五十九　松平君山　一四五—一四四
第六十　山脇東門　一四七—一四六

第六十一　淺井圖南　一四八—一四九
第六十二　三浦梅園　一五一—一五〇
第六十三　田中張海　一五二—一五三
第六十四　賀川有齋　一五五—一五四
第六十五　本木仁太夫　一五六—一五五
第六十六　楢林崛山　一五九—一五八
第六十七　宇田川玄隨　一六〇—一六一
第六十八　吉雄耕牛　一六三—一六二
第六十九　本居宣長　一六四—一六五
第七十　前野蘭化　一六七—一六六
第七十一　和田東郭　一六八—一六九
第七十二　柚木太淳　一七一—一七〇
第七十三　橘元周　一七二—一七三
第七十四　畑黃山　一七五—一七四
第七十五　橘南谿（宮川春暉）　一七六—一七七

第七十六　小石元俊　一七九—一七八
第七十七　小野蘭山　一八〇—一八一
第七十八　緒方春朔　一八三—一八二
第七十九　多紀安長　一八四—一八五
第八十　海上隨鷗　一八七—一八六
第八十一　竹內新八　一八八—一八九
第八十二　山本封山　一九一—一九〇
第八十三　吉益南涯　一九二—一九三
第八十四　村井椿壽　一九五—一九四
第八十五　池田瑞仙　一九六—一九七
第八十六　杉田玄白　一九九—一九八
第八十七　杉田玄白（木像）　二〇〇—二〇一
第八十八　三輪東朔　二〇三—二〇二
第八十九　南陽原　二〇四—二〇五
第九十　本木蘭汀　二〇七—二〇六

第九十一　片倉鶴陵　二〇八―二〇九
第九十二　片倉鶴陵（木像）　二一一―二一〇
第九十三　大槻玄澤　二一二―二一三
第九十四　多紀柳泥　二一四―二一五
第九十五　華岡鹿城　二一六―二一七
第九十六　川越衡山　二一八―二一九
第九十七　伊澤信恬　二二〇―二二一
第九十八　各務文獻　二二二―二二三
第九十九　畑柳泰　二二四―二二五
第百　中神琴溪　二二六―二二七
第百一　賀川蘭齋　二二八―二二九
第百二　宇田川榛齋　二三一―二三〇
第百三　山脇東海　二三二―二三三
第百四　奥劣齋　二三四―二三五
第百五　華岡青洲　二三六―二三七

第百六　華岡青洲（別圖）　二三九―二三八
第百七　橋本宗吉　二四一―二四〇
第百八　竹中南峰　二四三―二四二
第百九　最上德內　二四五―二四四
第百十　江馬蘭齋　二四七―二四六
第百十一　百々漢陰　二四九―二四八
第百十二　山脇東圃　二五一―二五〇
第百十三　岩崎灌園　二五三―二五二
第百十四　小森桃塢　二五五―二五四
第百十五　平田篤胤　二五七―二五六
第百十六　宇田川榕庵　二五九―二五八
第百十七　高良齋　二六一―二六〇
第百十八　小川汝庵　二六三―二六二
第百十九　岡節齋　二六五―二六四
第百二十　宇津木昆臺　二六七―二六六

第百二十一　宇津木昆臺(木像)　二六八—二六九
第百二十二　小石元瑞　二七一—二七〇
第百二十三　齋藤方策　二七二—二七三
第百二十四　高野長英　二七四—二七四
第百二十五　高野長英(別圖)　二七六—二七七
第百二十六　中川修亭　二七九—二七八
第百二十七　石坂蕙圃　二八〇—二八一
第百二十八　帆足万里　二八三—二八二
第百二十九　河津省庵　二八四—二八五
第百三十　楢林宗建　二八七—二八六
第百三十一　堀內忠亮　二八八—二八九
第百三十二　土生玄碩　二九一—二九〇
第百三十三　新宮凉庭　二九二—二九三
第百三十四　新宮凉庭(木像)　二九五—二九四
第百三十五　原老柳　二九六—二九七

第百三十六　永原三折　二九九—二九八
第百三十七　多紀元堅　三〇〇—三〇一
第百三十八　吉益北洲　三〇三—三〇二
第百三十九　賀來佐一郎　三〇四—三〇五
第百四十　杉田梅里　三〇七—三〇六
第百四十一　難波立愿　三〇八—三〇九
第百四十二　山本亡羊　三一一—三一〇
第百四十三　館玄龍　三一二—三一三
第百四十四　緒方洪庵　三一四—三一五
第百四十五　大槻俊齋　三一六—三一七
第百四十六　箕作阮甫　三一九—三一八
第百四十七　鳩野宗巴(七代)　三二〇—三二一
第百四十八　賀川蘭臺　三二三—三二二
第百四十九　花野井有年　三二四—三二五
第百五十　飯沼慾齋　三二七—三二六

第百五十一　三宅艮齋　三八—三九
第百五十二　桑田立齋　三二—三三〇
第百五十三　日高凉臺　三三一—三三三
第百五十四　鹽田順庵　三三五—三三四
第百五十五　廣瀨元恭　三三六—三三七
第百五十六　伊東玄扑　三三九—三三八
第百五十七　川本幸民　三四〇—三四一
第百五十八　本間棗軒　三四三—三四二
第百五十九　竹內玄同　三四四—三四五
第百六十　森立之　三四七—三四六
第百六十一　權田直助　三四八—三四九
第百六十二　今村了庵　三五一—三五〇
第百六十三　林洞海　三五二—三五三
第百六十四　淺田宗伯　三五五—三五四
第百六十五　小島尙質　三五六—三五七

索引

醫家先哲肖像集

一

西洋の書肆の店頭に醫家の肖像畫或は手術、或は診察、或は研究室の光景を描いた板畫などを飾いてゐるなどは日本に見られない學界の小景である。歸朝の折、此等の繪畫を求め置けば、好箇の記念にもなり、又土產にもなる。ミユンヘン醫事週報が比較的近代の大家肖像を附錄として讀者に頒つてゐるなどは、學者の面影を偲ぶ上に、良い資料となるものである。

西洋でも、日本でも、學者は多く重厚の態度を持してゐる。隨つて世間も亦た篤く、これを遇するものであるが、唯泰西に於ては、社會にユーモアの氣分が富んで居るから、學者を尊重する一方、巧みに學者の性癖を捉へて、これを寫し、能く天眞爛漫たる半面を世に紹介する。しかも、それが決して學者に對する禮を缺くに至らないのである。我國に於ては、この點とかく生一本の調子に陷り易く、學者を見るに、動もすれば

超世間的態度となるの傾向がある。それでは學者氣質の半面觀を描き得るが、未だ全貌に渡らないの憾があつて、如何にも窮屈である。

學者の傳記、學術の歷史に關する著書は、泰西には可なり多分に在る、我が國に於ても、高僧武將偉人學者名匠の傳記逸話を纏めた書籍は多い。今さし當り、我が記憶を辿つても、日本高僧傳、元亨釋書、近世偉人傳、常山紀談、近世叢語、近世畸人傳等が、すぐ頭に浮ぶ。又肖像を圖錄したものには千德圖錄、先哲像傳、前賢故實等を數へ上げることが出來る。

我が國に於ては、古くから世代の壽像を作らしめて、これを子孫後昆に傳ふるの風がある。そしてこれは必ずしも武家寺家などに限らず、弘く行はれた風がある。殊に大名重臣高僧學者畫家等の肖像畫は、家門の緣故から、又畫家の關係から、割合に世間に知られてゐるものが多い。而して、能くその子孫に傳承せられ、或は由緣ある寺院等に保管されてゐるものは、何かの機會に於て展覽せられ、觸目することも出來るが、その畫像を纏めた肖像集の如きは、或一部の外、概して公刊せられてゐないやうである。

二

先哲の傳記を繙き、或は名家の遺墨を觀るときは、その人の風格、その人の雅趣、その人の氣品を懷ひ、愛慕尊崇の念そゞろに禁じ難きを覺えるのである。しかし、これだけでは、まだその人物の全貌を窺知するに足りないのを遺憾とする。しかも、若しそこに、その人物の影像があつて、親しく之れに對ふことゝなれば、また格別の感情が新たに湧き來つて、眞にその人に接するが如き思ひあらしめるのである。而して、嘗てその人の行狀記から想像した面影は、寫眞によれば案外の風姿であつたことに驚くこともあり、或は輕妙洒脫の筆蹟から考へた先哲は、意はぬ氣骨稜々たる容貌の持主たりしに面喰ふこともある。おもふに、行狀記筆蹟などから、その人の風丰を偲ぶは、恰も烟雨の懸つた山容を見るが如く、單靄一たび晴れて、山景の眞を現はせば、峯嶺更に別樣の觀あつて、面目こゝに全きが如くである。要するに、肖像なき傳記は、未だ眞にその人の人格風姿の全貌を傳へざる低調の非難を免れがたいのである。

三

我が醫學の發達の歷史を、回溯的に明治初代の洋醫飜譯時代から、江戸幕府の末期に於ける蘭醫流行、蘭藥の輸入、同中期頃の漢醫學の爛熟期、それより江戸初期の南蠻醫藥の片鱗に觸れた洋醫搖籃時代、慶長・天正時代の漢醫學の勃興期、足利・鎌倉時代の民間藥療法、藤原・平安時代に於ける僧醫時代と回顧すれば、その間に幾多の傑出したる醫星が燦然としてその座位を占むるを看取するのである、云ふ迄もなく、此等先哲は何れも時代の先覺者である。そして、その修習したる學說と經驗したる博大の知識を以て、醫學の進歩に一歩づつその足跡を留めて、次代への指針を遺し、我が醫學の誇として當時の杏林に陸離たる光彩を放つたのである。かくて時代を劃したる學術も、次代には更に精微となり、周密となり、盡くることなき我が醫學の進歩は、源淵たる支那醫學よりも遙に發達進展して、見るべき業績の顯揚せることは、實に著大なるものである。又更に蘭醫學を咀嚼消化して、漢蘭折衷學が新たに唱へらるゝに至るなど、我が先哲の底知れぬ學問の深さと苦心の大いさとは、まことに痛切に感ぜられるのである、さうして、この力はやがて明治の洋醫勃興に於ける原動力となつたのである。今日我が醫學が泰西諸國と比肩して、毫も學術的進歩に劣らざるものは、畢竟先哲の學問が捨石となり、その苦心が遺傳したからである。

茲にそれ等を思ひ廻らせば、先哲の鴻大なる學恩に對して、限りなき敬慕の情に堪へ難いのである、

四

我が醫家先哲の傳記書は必ずしも少くはない。指を屈すれば、山本善美の海內醫林傳、宇津木昆臺の日本醫譜、畑惟龍の皇國醫林傳、賀島近信の皇朝醫史、山科元幹の本朝醫蹟、萬年純の皇國醫系、安藝道恕の歷世尙藥略傳、淺田宗伯の皇朝名醫傳、松尾耕三の近世名醫傳などが數へられるのであるが、更に寬永醫家系圖傳、寬政重修諸家醫譜の如き官撰のものをも加へ得るのである。而して、明治大正の時代に至りては、醫史學の研究頓みに、その歩を進め、鑽仰の學人相集り會するの氣運益〻盛なると共に、先哲の傳歷所關の著述愈々多からんとするは、聖代學界の爲めに慶賀に堪へざる所である。かくて刀圭家傳記の研究は隆盛を致してゐるが、遺憾に思はれるのは、此等醫家先哲の肖像を集めて剞劂に附したものが未だ曾て見當らない事である。自分は曩に松平樂翁公が、谷文晁に命じて描かしめた知友畫像集を、東京帝室博物館に覽て、心私かに公の友情篤き遺德を偲びつゝ、その書を繙き、當代知名の先覺の風姿に對して、

飽かぬ情懐に耽つたことがある。

先にも述べた如く、我が國には古くから、畫像を家に傳へる慣はせがあり、醫家に於ても同じく壽像を作つたものが相當に多いのであつた。醫家は一つには社會的位置が比較的良かつた爲め、又他には生活も豐かであつたことから、自然肖像を描かしめるにも都合がよかつた譯である、乃ち醫家にありては、隨分世代に亙つて描かしめた肖像が傳はつてゐるのである。尤も師弟間の情誼から、弟子は師の像を携へて家に歸り、その家に傳へるといふやうなこともあるから、醫を業とするもの丶多いだけ、他に比すれば醫伯の像は世間に流布したものも稍〻多いのであつた。然し「石碑不及口碑存底の高踏主義から、畫像などに無頓著であつた名家もある、例へば、蘭醫の大家桂川甫筑の一家、又は奈須玄盍、坪井誠軒などが畫像を遺さなかつたことは、周く知られてゐる所である。さりながら、後世からいへば、醫史考證の上から、又尊崇の情を滿たす上から、先哲の風姿に接することは望ましい事であり又大切なことである。隨つて到底それに接し得ざるものがあれば、學界にとつての憾事の極みである。

五

今日醫家先哲の畫像の遺されてゐる數は、しかし餘り多くはない。嘗て、富士川游先生は中外醫事新報に名醫傳を執筆せられたことがあるが、それには先生が遺族からの寄贈による寫眞を添へられてゐる。そして、更に又、同先生が一々遺族を訪ねられて、家藏の肖照から覆製せられた畫幅もあるが、それ等は決して多數ではないのである。

富士川先生の蒐集當時、卽ち明治の中頃には、醫門舊家が相當に門戸を張つて家業を繼いでゐたから、家傳の肖像も見ることが出來、又傳寫も出來た。既に明治維新による改革と共に沒落した醫家も相當に在つて、それ等の家藏品は夙に失はれて居つた。然し、時と共に凋落し來つた家も、尙明治中頃には微かながらも存したのであつたが、今日に至りては、その沒落一段激しく、富士川先生が當時訪れられた舊家も、最早や跡かたさへ殘らないのを知つて、自分は少からぬ失望を抱かしめられた。またよし訪ね當て得た處で、期待した資料は絶無となり、豫て聞き及んでゐる畫像すら不明になつてゐるのも多いのであつた。殊に大正十二年九月に於ける東京大震火災の厄は、幾多醫學界の舊家を燒いた。栗本家喜多村家杉田家片倉家今村家等名門の家は失くなり、家藏の什具は悉く烏有に歸した。このことは、資料に乏しき畫像の益々

少くなつた大きた原因である。杉田玄白の畫像・木像・片岡鶴陵の木像、岡勁齋等の畫像は余の記憶に依るも、この災厄を以て失はれたものである。

醫家に生れた自分は、父が祖父の月忌に、畫像を展べて、自ら像前に酒瓶を供へ、少年の自分にも共に禮拜せしめられたことを覺えてゐる。そして、その時は何時も、祖父の師に當る人の像や、又我が家が華岡流の外科を汲んで居た關係から、華岡青洲の肖像をも併せて床頭に列ね懸けてあつたのである。この家例の裡に育つた爲か、自分は何となく畫像に對して、こよなき尊重愛惜の情念を持つことゝなり、次第に先哲の肖像を蒐集する機緣を釀成したのである。大正の大火災に遭つた自分は、蒐集品を悉く失つたが、更にその後再び着手してから、いつとなく今日までに壹百六十餘種の畫像を藏するに至つた。之を纏めて刊行したものが、この醫家先哲肖像集の一編である。

大正の火災に遭つた自分の辛い經驗から、失はれ易い先哲の肖像は早く纏めて置かねばならぬと思ひ立ちながら、荏苒歲月が徒らに經過するのみで、遂に今日に及んだのであつた。もとより自分の蒐集は、決して滿足すべきものでなく、尙集成と稱するには餘地が甚だ多いからである。卽ち鷹取秀次・中條帶刀・栗崎道喜・古林見宜・味岡

三伯・岡本一抱・名古屋玄醫・黒川道祐・後藤椿庵・永富獨嘯・北山友松・岑少翁・中西淡齋・望月鹿門・山田圖南・三宅意安・戸田旭山・丹羽正伯・河口信任・荻野元凱・目黒道琢・田村元雄・太田長元・服部玄廣・栗本瑞見・小川筌船・衣關順庵・蛭田克明・奈須玄蟲等主擧すべきものさへ百餘を算へるのである。しかし、それ等は到底容易に蒐め得るものではない、偶々その人に擬すべき肖像を發見することもあるが、それが果して信ずべきものかの眞否の鑑識は洵に覺束ないのである、又名門の遠裔にして、今所在の不明なるため訪索の便を獲ないものも多い。本朝醫道から觀て大切な先哲の肖像若干を收め得ざることとは恰も齒の拔けたやうなものであるが、さはれ、よくこれを補うて完きを得る日は期し難いのである。仍りて姑くこの醫家先哲肖像集一編を刊し、若し、他日機あれば拾遺の編を出すを可なりとし、一先づ玆にこれを上版することにしたのである。

六

泰西に於ても、醫家先哲の肖像は多く遺つて居り、傳記書も相等に出版されてゐる。泰西の畫像は、近世に至つては餘り象徵的の裝飾を加へないが、中世紀頃には寓喩を加へた畫像の多くを觀たのである、そしてそれがその時代の特色であつた。卽ちそ

の先哲を飾るべく、その先哲の履歴に因んだ表象を以て畫像の周邊を裝ふのである。故に若しその寓喩の意味・表象の事實を知るときは、その先哲の面目を一層躍如たらしめるものもあるのである。絢爛にして豪華なるルネサンス藝術期に至りては、畫像は人間的現實よりは寓喩の象現による聯想の觀念に重きを置くの傾向を長じ、主體よりも附屬物に重要性を有せしむるものがあつて、その場合主客顚倒の譏を免れないのであつた。而してまた、寓喩的の象現は、時に畫像の人物を偶像化せしめる嫌ひを生じたのであつた。

かゝる寓喩の象現とは、例へば病者を看護する意味から鷄を以て臨床家を現はし、又昔の强心藥であつたから、鈴蘭を以て本草を意味せしめ、龍が疫病を祓ふの意を寓し、蝶が世を去る靈魂を表象し、蛇が「蛇の如く賢かれ」の語の如く賢明を意味するの類である。又醫神アスクレピオスの象徵動物であることから、轉じて醫學の象現となり、又モーゼがイスラエルの民を蛇禍から救ひ出した古典によつて禍災を表示するが如き色々の場合もある。また、鳩は病院の標章であり、鶴は保健の表示であつた。此等の寓喩を理解して中世期の畫像に對する時は、一段の親しみを持つことが出來るのであるが、然し、近世に至りては、その反動思想から、畫像は單一化して描かるゝこ

とになつた。それは他の藝術と同樣である。

七

我が國に存する畫像には、時代を劃すべき表示的描法はなかつた。常に全幅唯その人を飛躍せしむるの餘裕を殘す手法で、東洋藝術の純味を持つてゐるから、附屬的の裝飾は殆んど無いのであつた。若しまた裝飾のものがあつた處で、それは畫像の卽興的の手法であり、餘興的の仕草であり、畫面の釣合から施された配置に過ぎないから、泰西の畫に示すが如き象現の意味は無いのである。

然しながら、我が畫像には讃詞の題せられたものが多い。これは泰西畫に見る銘記とは全く意味の異つたもので、之れも東洋藝術に副ふ一異彩である。

今試みに、醫家の自署した讃詞の二三を拾つて見よう。

曲直瀨翠竹院道三は、元龜・天正の頃、輦轂の下に在つて、李・朱の醫學を正統に傳へ、これを天下に弘めて、我が醫學中興の祖とせられた人である。そして、その方術には雲上の御歸依深く、典藥頭の榮を荷ふに至つた。しかのみならず、彼はまた豐公始め幾多の武將から一世の崇仰を受けたのであつた。その道三が七十歲の時に畫かしめ

た像に題したのは、

一个門下生、幼而學、自少至壯、侍予局傍。以玄朔爲諱、以東井爲字也。功磋以授普救之德、琢磨而附講讀之業。故今也欲使啓迪後人、而令營隋屋、竊以不遠千里而負笈索師、緇素盈席、香輪茅舍、而告病受療、貴賤競門。是卽有朋自遠方來、亦不樂乎。德不孤心有隣之謂也。莫倦莫懈時因丹青名工狩野貞延、圖予頑像、以責俗儅不得默止。

說脈談治術日新。生涯手卷跋風塵。姪孫博施求奇効。徑授靈方影動唇。

天正第五丁丑年、臘月　一溪叟道三、書于翠竹庵中。

といふ讃詞であつた。道三既に大に名を成したるも、尙醫道を守り、仁を施して驕らず、讀書工夫、奇效を求めて倦まざるものがあつた。この氣慨は天下の名醫たる品位の存する所である。而して、一たび是を誦すれば、無限の敎訓、吾人の怠惰を戒むるに足るのである。

曲直瀨玄朔は道三の孫であつた、そして、祖父の遺業を繼けて、益〻その道に精進し、子弟門人、その麾下に聚るもの無慮五百に達し、一家醫流の旺盛當代の譽とせられた。彼は、自ら肖像に

辛勤醫業救天傷。意在衆人自己忘。老去得頤神妙術、安心是藥更無方。

嫡孫典藥頭玄鎭命畫工模寫予悴像求贊語。不克辭讓。以汚楮上云爾。

寬永八辛未歲、孟夏吉辰

東井叟玄朔　八十三歲

と題した。

玄朔年若きとき豐臣秀次の事に座し、常陸に流適し、辛勤すること數年、後ち京都に遷り、道三の敎を守りて倦まず、その間に多くの著述を遺した。後ち江戸幕府に召されて寵任甚しく、姓を今大路と改め、世代醫官の筆頭となり、大名格を以て遇せらるゝに至つた。玄朔毫も驕らず益〻醫道に精進し、妙術を體驗し、遂に老去得頤神妙安心是藥更無方と喝破せし所、到底庸醫の想ひも及ばざる心境であつて、思趣清爽、腋下に凉風の颯々たるを覺える。

越智平庵は名門の出である。彼の祖父正淋が家には數千卷の醫書が藏せられた。養安院藏本として世に喧傳せられるのは是れである。しかし、正庵は徒らに蠹魚の間に空理を求めんよりは、早く出でて救療の術を修むるを良しとし、八王子在にあつてその道に努めた、そして後ちに法印となつた。

傳眞是非眞、寫照何所照。只覺添眼華、堪發他一咲。

はその肖照の題詩である。

平庵は淡白な性質で、得る所の金帛は手に隨ひて散じ盡し、毫もこれを惜まないのであつた、題詩も乃ち一味の禪意を帶び輗達高潤の性格を表し、脈々たる生氣を發してゐる。

貝原益軒は、自ら書して曰く、

平生心曲有レ誰知。常畏二天威一。欲レ勿レ欺。存頒沒寧雖レ不レ克。朝聞夕死豈不レ悲。幼求二斯道一在。孤懷德業無レ成。夙志乖。八十五年爲二曷事一。讀書獨樂是生涯。

と、益軒先生にして始めて謂ひ得べき所である。その意よく徹し、穢心忽ち消盡し邪思を淨化す、眞に教訓の逸品であり、朗々誦すべきものである、

吉益東洞は一世の豪傑である。豪邁の氣宇、その篤く信ずる所に向つて主張を拄げず、三十餘年の努力、遂に醫界をして、その風に靡かしむるに至つた。彼は門人の乞ふがまゝにその照影に題した。

死生有レ命。救レ疾之愼。萬病一毒。毒去無レ疾。

まことに自說を述べて餘蘊なきもの、簡素瀟洒、よく東洞の風格を躍然たらしめてゐる。

田中張海は吉益東洞の高足である。東洞が萬病一毒の學說を吐いてから、學者の論議は沸いて盡きざるものがあつた。蓋し德川時代漢醫學の爛熟期を之れによつて一劃したのである。張海は吉益派の驍將として反東洞派を駁し、論旨を徹底せずんば已まなかつた英姿は、今日醫界の論爭と、その趣を同じうしてゐる。此鬪爭に燃えつゝ張海が自ら肖像に題した。

旅館窮陰燈影寒。疾醫方術樂二瓢簞一。放曠奇士。泣二途極一。反復人情奈二路難一。冀北幾年期二伯顏一。豐城何日遇二雷看一。壯心未レ去。皆堪レ笑。箕踞空歌伏櫪歎。年年爲レ客滯二三津一。況復今春遇二誕辰一。雪讓二衰容雙白鬢一。梅咍二瘦骨半紅唇一。齡同二伯玉一。不レ能レ化。志學二越人一。難レ得レ眞。小子誤比二千載樹一。願將二貞節一護二斯身一。

の長詩を看れば、その志節の剛強なる、その識見の卓絶なる、想ふに餘りありといふべきである。彼が鬱然として一世の冠冕たりしもの、また所以なきではない。

村井椿壽は、吉益東洞門四天王の一人とも稱すべき學者である。彼は業を修めて熊本に歸り、父見朴に繼いで、その帷を垂れ、東洞の學派を汲んで毫も他に讓らず、衆醫を屛息せしめて、九州を風靡し、吉益派の探題職と稱すべきものであつた。椿壽は、しかし一面では音曲の愛好者であつた。彼は別に琴山と號し、襟懷清逸そゞろに雅趣

を弄んだのである。晩年脫俗の境に入つた彼は、自ら肖像に

迂貌拙形似焉似焉。天下後世笑焉哉焉。

の語を題した。言論堂々筆戰銳く敵の心膽を寒からしめた當年の椿壽と同人かと疑はしめる。彼れと張海とを比すれば、實に面白い對象である。

百々漢陰は豪邁耿介の士である。彼は我が醫方の漢土醫學の糟粕に過ぎず、未だ純然たる本朝醫道の本體を見ざるを慨し、又常に醫道の頽委を戒めた。

畫虎模龍終不就。志高才劣歲空徂。同思六十年來跡。紙故堆中一白魚

形軀委土作塵虛。神向冥々翔有餘。佛與閻王非我友。烟霞佳處別謀居。

三旬絕穀命如綫。旦暮定去歸九泉。要認余吟魂所在。祇園長樂翠微邊。

は肖像の自題である。佛與閻王非我友の詞結句と併せ見て、その風懷を想ふべきである。

橘元周は江戸幕府の醫官、世々法印に叙せられた名門の出である。彼は頗る溫厚篤實の人であつた。その自ら肖像に題して

克己復禮近取我門非醫勿視非醫勿聽。

橘　元周題

といひしものは、蓋し醫家の格言として上乘の所作、日常之を守らば誤なしとすべきである。

華岡青洲は佛心鬼手の化身である。一たび刀を取つて腕を揮へば病魔を斷ずること回春妙術の技は、我が外科學の誇である。彼の發明したる全身麻醉藥は、世界に向つて今猶萬丈の氣焰を吐き得るのである。

竹屋蕭然鳥雀喧。風光自適臥蓽村。唯思起死回生術。何望輕裘肥馬門。

は彼が肖像の題詩であつた。

青洲は紀州平山の僻村に門戸を構へたが、百里の途を遠しとせず、診を求め療を乞ふもの常に門戸に滿ち、又華岡流の外科術を修得せんと欲して、笈を負ひ來つた醫生は、其數幾千たるを知らない程であつた。華岡は卽ち正に日本外科學の本山であつたのである。彼れ青洲が門外より一步も出でず只管發明したる外科手術に精進して止まなかつた學者的良心には、今日尙吾人の襟を正さしむるものがある。想ふに此題詩を三唱し、自ら省みて、我が行徑を恥ぢざるもの果して幾人かある。利達榮華は何人も欲する所のもの、轉結の兩句、眞に凡俗の針砭である。

本間玄調は、華岡青洲の門人中傑出した優物である。自ら肖像に題して曰く

吾所主張亦活物窮理。尙軒岐、而未必盡信其書。惡蠻貊、而未必盡排其術。博採諸五大洲中、日試月驗一次、歸于活人。卽是神州之醫道耳。

と。玄調は實驗科學者であり、自說の主張者でもあつたが、又愛國者でもあつた。一世の大家たりし彼の學識思想は、尙今日青年學者の眷々服膺すべきものを含蓄することを感ず。一にも二にも泰西の亞流を以て甘んずる拜歐學者には、胸に三尺の秋水を擬せらるゝの趣があるであらう。識者此人を稱するに單なる外科醫者を以てせざるは、正に故ありといふべきである。その識見、その情熱、永く後世に範を垂れるものと仰がねばならない。

新宮凉庭は、名儒齋藤拙堂から「醫而儒、山人而士丈夫」と評せられたが、この評は至當である。彼は決して一定の規矩を以て律することの出來ない人物であつた。彼の家業は大に行はれ、彼の家益々殷富となり、蓄財は數萬に至つた。しかし、彼は自ら奉ずること儉素で、藺席敝るゝとも年を經て換へないといふ風であつた。しかも時偶々連年の凶作に遭ひ、四民困弊するを見て、凉庭は救助の策を諸侯に獻じ、又私財を拋つて國用を援けたのであつた。彼はまた順正書院を東山南禪寺畔に建てゝ四方志學の徒を迎へた。彼が肖像に題した

逸居恰似坐低篷。天出奇才忌大功。醫國忠言嫌苦烈。呈文氣脈欠流通。芙蓉不及松柯勁。蚯蚓却咍蛛網工。痴也頑乎任相笑。散人只合老山中。

の含蓄ある詩趣は、惻々として人の肺腑を衝くの概があるものと謂はねばならない。鬼國山人の面目躍然たるを見るのである。

箕作阮甫は、西醫學者として江戶幕府末期に異彩を放つた一人である。自らその像に題書して曰く

病骸不復惹閑愁。絕望功名心自休。憐殺雙肱似蟹腕。幸欣兩眼辨蠅頭。雲烟低作菰蒲雨。霜露結成天地秋。尙友古人無日夕。泰西之國每相求。

と。箕作家はその後多くの洋學に通じた鉅材を出した。阮甫の志成れりといふべきである。一詩、學者の氣格崇高なるを感じて止まないのである。

以上僅かに自ら題したものを擧げて見たが、各自の面目それぞれ躍々として詞表に溢れ、吟誦するに從つて、極りない高風淸趣を覺えるのである。

八

更にまた他の畫像に贊語を題せんとするは、一層難事である。贊者よく、彼の生涯

に熟通し、彼の人物を洞察し、彼の手腕を精知したるものに非ざれば、彼の眞面目の一端にだに觸れ得るものではない。唯その人を得る時は、能く生氣を傳へ面目を活す絶妙の趣があるのである。

奈須玄虫は一世の曲物であつた。江戸幕府醫官多紀家の權勢にも屈せない高踏脫俗の學者であつた。彼の祖は初代曲直瀨道三に就いて醫學を修めた、道三は足利末代の醫田代三喜より李朱の醫學を受けた學者であつた。玄虫は夙にその三喜の學德に傾倒して居つたのである。彼は一日野州古河に遊んで三喜の木像を一向寺に拜し、之を寫して

拯濟短折躋之壽域儼然遺像、永仰隱德。

と贊した。三喜の藥方は、弘く關東に傳へられてゐる。醫人にして祀られたものは僧鑑眞と三喜のみであらう。三喜の學德知るべきである。

井上靈叟は玄朔の門人である。彼は幕府に召されて法印に叙せられ、交泰院と稱した。その學、その技、當時彼に比すべきものなかつたのである。師玄朔は乃ち彼の像に

醫業辛勤八十年。骨清神爽貌天全。陰功那直滿千數。却去蓬萊作地仙。

右

前典藥頭道三先生、題我小影之辭也。褒揚難當。小子玄億、屢請予書。此。因弗揣老醜。漫塗抹與之。於乎汝不視我形貌、而視我精神。不學我軌轍、而學先生之活法、則庶乎獲十全矣。

天和壬戌之歲冬之孟

九々老翁呵手書于交泰院中

と贊した。靈叟の風格を傳へて、正に餘りなきものである、この師ありて、この弟子ありと謂ふべきである。

鳩野宗巴は、一代の風雲兒であつた。彼は南蠻の密航船に乘じ、外國に赴きて醫學を修め、後飄然として歸國し、九州を漂遊する間に細川侯に召され、外科醫の腕を揮ふに至つた。長仙壽師は、彼の肖像に

醫得覺神農道緣深。參宗。相顏雖滅去心月照尊容。

元祿十丁丑年閏二月八日之早朝、端然而逝。壽世五十七歲

覺峰道藥老居士

大雲山僧長仙濤謹讚

と贊した。佛僧の讚としては或は佳ならんも、一代の風雲兒に對する著語としては

模糊たる雨山を見るが如く、物足りない感がないでもない。

東洞は醫傑である門人村井椿壽はその肖像に

憶昔南陽子哀憫濟蒼生洋洋述嘉言舊章誰復賡離照若天經成緯自光瑩亦似警軍帥凜凜列霓旌。
相敵欲決雄龍劍匣中鳴執之威颺持之計衡平哀哉千餘載天下失權衡嗟我　日東邦魂偉出人
英。東洞夫子賢弘道守其貞厥姑生中國駕轅入帝京游洛恩波洽身老在　王城玉帛不招俊獨主
四方盟崑岡生玉髓麗水出金精睥睨千載上目睫一堂堂驅逐和緩儔欣慕扁張名經方述不作竊比
我老彭雖有靈方貴何必問滄瀛邈矣炎炎世恬憍無所營唯存鍼與艾足以養眞情靈蘭久不馨斯
遂粉更索隱且行怪後人各力爭人何不鼎食鹽梅失和美偉哉經方策玉振與金聲一弁金匱訣獨
得奇贏皎如懸玉鏡長亘萬古明吾生西僻邑私淑存寸誠昔曾踏東海凄然拜墳塋乃是醫門傑既爲
王者師其人與骨朽拊膺淚盈盈吾儕尚方士懷古寸心傾。

壬寅暮春於東都龍邸

東肥邨井炳書時年七十

と讃した。時に椿壽は高齢七十歳であつた。自像に飄逸の語を題した高踏的の風格の持主も、師の像には端嚴壯重恩情の切々身に逼るものあるを寄題し、人をして襟を正しうせしめるのである。東洞の學説はもとより炳焉たるものであつたが、しかし未だ圓熟せざりし所もあつた。しかも、その門下に俊髦輩出し、よく師說を紹述して世の疑惑を解き、東洞の學名、かくて顯揚せらるゝに至つた。

賀川玄悦の肖像に、皆川淇園は題書して

民之將生時或折翁善察幽造化弗匱肆順厥理救之危丞設術著論建法遺則。方策之傳天地罔極。
民之賴全何唯兆億。噫嘻大矣翁之功德。

と賛稱した。

我が國支那醫學を傳へてから、流通既に久しいのであつたが、その學ぶ所多くは漢土醫方の糟粕に過ぎないものであつた。享保以來人物輩出し、醫道も大に面目を改めたが、賀川家の產術、華岡流の外科術を除いたならば、果して眞の本朝醫道の面目を發揮したものがあつたであらうか。賀川子玄の功德は、日本醫學のあらん限り忘れることが出來ない。民之賴全何唯兆億嘻大矣翁之功德とは眞を得た讃語である。

佐倉侯堀田正衡は自ら大槻玄澤の肖像を描き、侯の父正敦は、これに

敷島のやまとにはあらぬ蘭の花國の香さへや世にほふらむ

の讃歌を副へて贈つた。そして、時の人々は、いたく之を玄澤の光榮とした。

帆足萬里は、その師三浦梅園の像に

峨有之山。高峰軼雲。降生先生。英儁超羣。洞覽天地。殫極鬼神。條理之說。數十萬言。闡發幽晦。以覺斯民。

戊辰二月　　帆足萬里　拜譔

と贊した。三浦梅園は醫にして條理學を創した學者で、群儒と夐然其見を異にし、儼として一家の說を建てた傑出した學者である。帆足萬里は梅園の學理を承けて更に窮理學を講じ、泰西學術に出入した。蓋し梅園に繼いで其學を大成したのである。萬里は梅園を尊崇して措かざりし人、梅園に讃詞を寄するもの、始めて眞人を得たりと謂ふべきである。

伊達宗光は高野長英の像に

學術走西域、雙眸略五洲。看吾業就後、天下仰餘流。

高野長英先生作、題眞影上。

辛卯六月　　南洲書

と贊した。長英のことは今更謂ふまでもない。讃詞の至當なる、何人もまた異議ない所であらう。

九

傳記と肖像とは車の兩輪の如くである。兩者相待ちて、始めてその人物を躍動せしめ、その風格を思慕せしむるに足るのである。我が國に肖像集公刊の少ないのは、國情から來たものであらう。しかも、その肖像畫に依つて、如上本質的の眞意義の外に、時代の姿相を知り、又畫風の時潮を知ることも出來るのである。吾人は世間博達の士が種々なる方面に於ける肖像畫集を出されんことを望んで止まない。なほこゝに刊行する肖像集は、專ら眞本から傳へたものであることを附言して置きたい。

また、前述せる如く、醫家先哲の肖像は今後猶努めて搜索しなければならない。若しこれに關して教へらるゝ所あらば、實に著者の至幸とする所である。冀はくは遺を拾ひ闕を補つて、後篇を出す日の遠からずして來らんことを。編者は足を翹てゝ切にこれを望むものである。

本書の裝畫は結城素明畫伯の彩筆を辱うし、また題簽の文字は岡麓大人の揮毫を煩はした。尙肖像畫の傳寫については、東京帝室博物館の鷹巢豐治君の筆勞を惜しまれざりし芳志と、寫眞撮影板には菅保男氏の多大の犧牲を拂はれし情誼とを特記

し、併せて共に深甚なる感謝を捧げる。

昭和十一年初夏五月

藤浪剛一（しるす）

圖像

第一僧行基

泉州大鳥郡ノ人、天智天皇御宇七年ニ生マル、年十五出家ス、天平二十一年二月二日寂ス年八十二。

第二　勸勒

百濟ノ人、推古帝御宇十年十月我ガ朝ニ貢來シ、方術天文地理ノ書ヲ獻ズ、留テ僧正ニ選バル。

第三　僧鑒眞

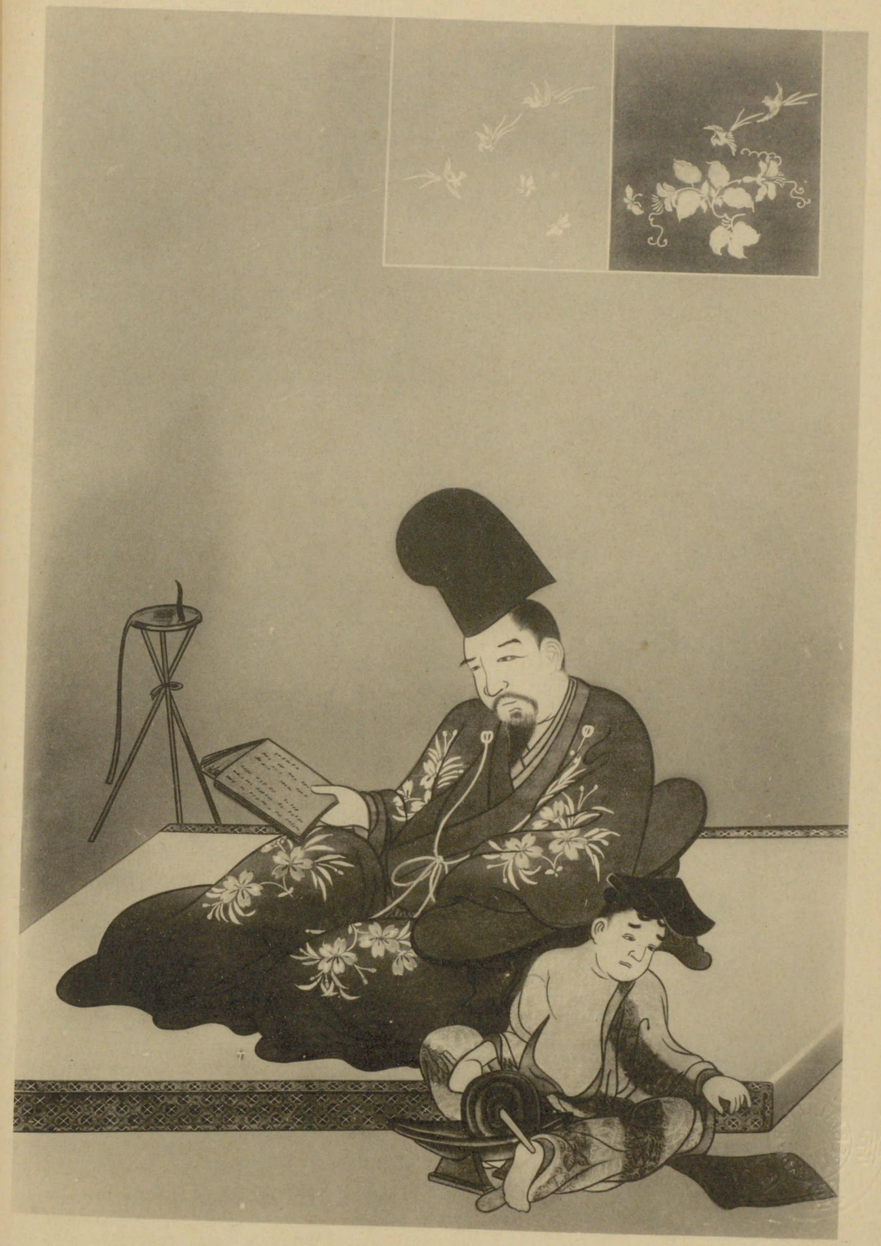
唐ノ楊州江陽縣ノ人。年十四大雲寺ノ僧智滿禪師ニ附シ出家シ、後チ長安實際寺ニ戒ヲ受ケ、天寶元年大明寺ニ在リテ衆徒ノ爲メニ律ヲ講ズ。天平五年我國ノ榮叡、普照等遣唐使丹墀眞人廣成ニ從ヒ唐ニ留學シ鑒眞ニ從遊ス因テ勵メテ東遊セシム、顯ニ遇ヒテ僅ニ身ヲ以テ免レ、後チ再ビ東發スルモ漂流ス、更ニ三次東遊ノ志ヲ得ズ。天平勝寶五年十月、我國使藤原清河、大伴胡麻呂ノ船ニ上リ弟子法進等八人之ニ從フ、六年正月二十六日大宰府ニ入リ、二月一日難波ニ到ル、東大寺ヲ館トス。八年五月勅シテ和上ニ拜シ、和上鑒眞禪師ト稱ス、寶宇二年大和上ノ號ヲ賜ヒ僧綱ノ任ヲ停メ新田部親王ノ舊宅ヲ戒院トス、則チ後ノ唐招提寺ナリ、七年五月六日物化ス、年七十七。鑒眞學問該博、志行高潔ニシテ一時ノ師表タリ、聖武天皇以下戒ヲ受クルモノ甚ダ多シ。鑒眞兩目明ヲ失スレドモ、强記人ニ絕ス、其背誦スルヲ以テ雌黃ヲ下ス。天下其書ニ信賴スト云フ。鑒眞又醫藥ノ事ニ通ジ殊ニ本草ニ精シ、本朝ノ諸藥物其眞僞ヲ知ラザルモノ多シ、鑒眞ニ勅シテ眞僞精粗ヲ辨定セシム、鑒眞鼻ヲ以テ之ヲ別チ一モ錯誤スル所ナシ。韓廣足就イテ學ビ藥物ノ眞贋ヲ分辨スルノ術ニ通ズ。後皇大后弗豫、鑒眞藥ヲ獻ジ大ニ效驗アリ、因リテ大僧正ヲ授ケラル。當時我邦已ニ本草ノ學アリ而シテ未ダ西土ノ藥品ニ精フスルコト能ハズ、鑒眞爲メニ之ヲ辨定スルニ及ビテ邦人之ニ倣ヒ斯道益闢ケタリ、世ニ鑒上人祕方ヲ傳フ。又其像ヲ祀ル、像祀セラルヽモノ鑒眞ト田代三喜アルノミ。

第四　丹波康頼

丹波矢田郡ノ人、其先ハ漢靈帝ニ出ヅ、靈帝五世ノ孫ヲ阿智王ト曰フ、應神天皇ノ時歸化ス、天皇之ヲ大和國檜隈郡ニ封ジ以テ使主トス、其子都賀ニ二子山木、志努アリ、志努別ニ家ヲ成シ出デテ丹波國ニ居ル。康頼ハソノ五代ノ孫ナリ、特ニ醫術ニ精進シ、丹波宿禰ノ姓ヲ賜ヒ、累進シテ鍼博士、左衞門佐、兼丹波介ニ至ル。天元五年醫心方三十卷ヲ撰ス、其書隨唐方書ヲ捃摭シ、稱シテ本邦方書ノ府庫トナス、永觀二年書成リテ奏進ス。醫心方ハ稀世ノ珍ナルノミナラズ、其中ニ支那ニハ既ニ佚亡セル逸書遺典ヲ收メタルヲ以テ、之ニヨリ當時隨唐醫學ノ眞相ヲ窺フベキ絶世ノ鴻寶ナリ。又以テ諸生ヲ課試ス、長德元年四月十九日歿ス、享年八十四。

第五　丹波康頼

史傳　前ニ出ヅ。



第六　丹波雅忠

康頼ノ子重明、ソノ子忠明雅忠ヲ生ム、長元七年典薬頭ニ試シ、右衛門佐ニ補ス、永承中丹波介トナル、任満チテ還ル。時ニ後冷泉天皇不豫、雅忠ニ命ジテ薬ヲ上ラシム効アリ、丹波權守ニ遷ル。又關白藤原某ノ病ヲ治シテ效アリテ、施薬院使ニ補セラル、專ラ施薬院當道ニ任ズルコトハ雅忠ヨリ始マルト云フ。承暦四年高麗王妃病ム、王書ヲ太宰府ニ送リ厚幣ヲ以テ良醫ヲ求ム、時ノ人雅忠ヲ以テ選ニ擬シタレドモ朝廷其書辭ノ禮ヲ失フヲ咎メテ之ヲ却ケ、太宰府ヲシテ報牒セシム、内ニ雙魚難達鳳池之月、扁鵲何入鷄林之雲ノ語アリ。之レヨリ世ニ雅忠ヲ日本扁鵲ト稱ス。永保元年、雅忠晉唐方書ニ就イテ救急方ヲ摘錄シ醫略抄ヲ著ハス、寛治二年二月年六十八ニシテ歿ス。

第七　出雲廣貞

攝津ノ人ナリ、侍醫ニシテ中外記典藥助美作權掾ヲ兼ヌ、延曆二十四年天皇弗豫廣貞御藥ヲ奉ジテ效アリ、爵一等ヲ進メラル。大同三年勅ヲ奉ジテ安部眞直ト共ニ大同類聚方一百卷ヲ撰ブ。又別ニ命ヲ蒙リ、唐制ニヨリテ藥升大小ノ量ヲ定ム。廣貞後チニ內藥正ニ擧ゲラレ、宿禰ノ姓ヲ賜ハル。貞觀十二年歿ス。著ス所ニ難經開委アリ。

第八僧忍性

字ハ良觀建保五年大和磯城島ニ生マル。年十六額安寺ニ入リ出家ス、悲田院ヲ修シテ貧人ヲ救ヒ病者ヲ憐ミ、奈良般若坂ニ病舍ヲ建テ、癩人ヲ收容ス。又鎌倉ニ錫ヲ留メ病者ヲ集メ撫活ス。北條時宗上人ノ爲ニ桑谷ニ療病舍ヲ作ル。二十年間ソノ救濟憐施スルモノ五萬七千二百五十人ニ及ブ、時ノ人醫王如來ト呼べリ、嘉元元年七月十二日寂化ス、法齡八十七。

第九　越後丹介

鎌倉時代ノ人、不詳、馬醫ヲ以テ著ハル。

第十　安藝守定

其祖安藝平氏ニ出ヅ、因テ氏トス。延文三年足利義詮ノ室紀良子娠ス、之ヲ療シテ男ヲ擧グ是ヲ義滿トス、因テ其邑ヲ割テ封ジ、又尚藥ニ奏シ、喜慶中從四位上ニ敍シ、大膳亮ニ任ゼラル。子孫業ヲ繼グ、宮中產ヲ治スル皆安藝氏ニ屬ス。初メ守定二條家ノ家司タリ、春日神社ニ詣シ通夜祈ル所アリ、時ニ一女子來リ治ヲ求ム、守定爲ニ鍼ヲ施シ藥ヲ與フ、女ノ病頓ニ除カル、喜ンデ恩ヲ謝シ曰フ、妾ハ猿澤ノ龍女ナリ、厚惠ヲ受ケテ報ユル所ナシ、妾ニ靈方アリ以テ贈ラント一卷ヲ遺シテ去ル、治產方ナリ。旁ニ龍鱗三片ヲ留ム、守定之テ異トシ、其方ヲ試ミルニ驗アリ、遂ニ女科ノ名ヲ得ル、之ヲ婦人科專門家ノ始トス。ソノ子貞守亦女科ヲ以テ名アリ。

第十一　田代三喜

田代三喜名ハ導道、字ハ祖範、範翁、支山人、意足軒、江春庵、善道ノ號アリ、父ハ兼綱ト曰フ、寛正六年四月八日武州川越(又ハ越生)ニ生マル。年十五ニシテ方伎ニ志シ、妙心寺ニ入リ浮屠トナリ、又足利校主利陽ニ就テ醫ヲ學ブ。長享元年明ニ渡リ李東垣、朱丹溪ノ術ヲ月湖及ビ恒德ノ孫ニ受ケ、留學十二年、業成テ明應七年三十四歳醫書ヲ携エテ歸朝シ鎌倉江春庵ニ居リ、後下總古河ニ移ル、時ニ永正六年ナリ。三喜ノ名聲益々四方ニ宣揚シ、世古河三喜ト稱ス。天文六年二月十九日歿ス、年七十三(或ハ七十九ト云フ)。古河長谷村一向寺ニ遺像アリシガ、明治年間燒失ス。像祀セラルモノ古來鑑眞ト三喜トアルノミ。

著ス所ニ、捷術大成印可集、諸藥勢揃、當流和極集、直指篇、夜談義、藥種穗名醫案口訣三喜十卷書アリ。

第十二　曾谷慶祐

半閑軒閭翁ト稱ス、世々瘍科ヲ業トス。慶祐ニ至リ、半井春蘭軒ニ從ヒ、大方脈ヲ學ビ内外ノ治ヲ善クス。

一ヶ門下生幼而学自少玉粧侍平局儒ノ玄翁為師以
東井為字也切磋以授晋故之儒珠慶而附講請之業
故今也数使啓迪後人而今営陋屋窃以不遠千里而賁臨
索帥緇素盈庭香輪茅舎而奇病受療貴賤競門若市
有朋自遠方来不亦楽乎徳不孤必有隣史称其後矣
僻時画幷青名工狩野典延画平頓像ノ賛俗偽不得黙止
説蔵談治術日新生涯千巻跋風慶誌孫博施救奇
効俚授霊方影動座
天正第五丁丑年臘日 一渓史道 三書千
翠竹巻下

第十三　曲直瀬道三

名ハ正盛又正慶トモ云フ、字ハ一渓、雖知苦齋又盍靜院ト號ス、永正四年九月十八日京都柳原ニ生マル。年十三相國寺ニ入リ喝食トナリ等皓ト稱ス、年二十二東遊シ下野足利學校ニ入ル、時ニ田代三喜武毛ノ間ニ往來シ、李朱ノ醫法ヲ說ク。先生享祿四年十一月始メテ三喜ト柳津ニ會シ其說ヲ與聞シ講究十年ニシテ京都ニ還レリ、時ニ天文十四年ナリ。先生學舍啓廸院ヲ洛下ニ立テ後進ヲ誘掖ス、其名知ラザルモノナシ。天正二年啓廸集八卷ヲ脫稿シ叡覽ニ供ス、天皇大ニ嘉賞シ玉ヒ、翠竹院ノ號ヲ賜ヒ、又僧策彦ニ勅シテ其書ニ序セシメ玉フ、時人之ヲ榮トス。晩年享德院ト改ム、文祿四年一月四日病ンデ歿ス、年八十九、京都十念寺ニ葬ル。

御陽成天皇ノ時、慶長十三年四月正二位法印ヲ贈ラレ、道山ノ字ヲ賜フ。

著ス所ニ全九集、授蒙聖切方醫燈藍墨醫工指南針灸集要、須愼類集、試驗神術類、養生論假字素女論事林警古圖、自他充溢論可有錄、老師雜話記、切紙針灸穴解正心集、宣辨類增補炮灸論、自諫袖鏡、神代記錄、夜談記、小乘覺自養錄、修意撮要、永日九九茶話、本草能毒アリ。

第十四　施藥院全宗

德運軒ト號シ、又藥樹院法印ト稱ス、幼ニシテ叡山ニ入リ僧トナル、後チ還俗シテ曲直瀬道三ノ門ニ入ル。豐臣秀吉ノ信重シ、後チ法印ニ敍シ、施藥院使ニ任ズ。先生秀吉ニ謀リ請フテ施藥ノ所ヲ禁闕ノ南門ニ建テ、藥局ヲ開キ普ク四方ノ民人ノ疾病ニ苦ムモノヲ治療ス。全宗從五位下侍從トナリ正四位ニ進ミ、又昇殿ヲ許サル。慶長四年十二月十日病ンデ歿ス、年七十四又曰ク六十九、京都十念寺ニ葬ル。

第十五　曲直瀬正琳

幼名ヲ刃五郎ト云フ、字養庵、玉翁ト號ス。本姓一柳、若冠ニシテ翠竹院正慶ニ贄ヲトリテ學ブ、正慶妻スニ女孫ヲ以テシ、曲直瀬ヲ名乘ラシム。文祿元年十二月二十八日法印ニ敍セラル、同四年浮田秀家ノ室奇病ヲ得先生藥ヲ處シテ驗アリ。秀家朝鮮ノ役ニ會シ、秀吉彼ニ命ジ、醫書ヲ獲テ之ニ贈ルベシト、秀長、朝鮮ニ於テ牧獲スル所ノ書數十笥ヲ以テ悉ク先生ニ與フ。先生ノ家世々奇書ニ富メルヲ以テ名アリ。享保二年ノ大火ニ遭ヒ其大半ヲ烏有ニ歸セリ。

慶長五年後陽成天皇不豫、先生召サレテ藥ヲ上リ殊效アリ、院號ヲ賜フ、依テ子孫ニ至ルマデ養安院ト稱ス。同十年德川家康ノ召ス所トナリ、同十三年隔年東上ス。慶長十六年八月九日遂ニ病ンデ其家ニ歿ス、年四十七、紫野大德院塔中玉林院ニ葬ル。

第十六　曲直瀬正純

本姓岡野井、父ヲ徳安ト曰フ、醫ヲ曲直瀬道三ニ學ビ、後其女婿タリ、故ニ曲直瀬氏ヲ冒ス。慶長十三年ニ法印ニ叙セラレ、享徳院ノ號ヲ賜フ、年四十七ニシテ歿ス、歿年詳ナラズ。

第十七　御薗意齋

名ハ常心、通稱源吾、意齋ハ其號ナリ。打鍼ノ術ヲ以テ知ラル、名家ニシテ、意齋ハ實ニ其流中興ノ祖ト稱セラル。正親町後陽成ノ兩天皇ニ奉仕シテ鍼博士トナル。

元和二年十二月病ンデ其家ニ歿ス。

著ス所ニ、醫家珍寶、鍼灸祕穴、鍼灸全論、神華祕傳アリ。

第十八　曲直瀬玄朔

名ハ正紹、通稱道三、東井ト號ス、天文十八年京都ニ生マル。幼ニシテ父母ニ離ル、故ニ正慶養フテ己ガ子トナス、天正年九年昇殿ヲ聽サレ、翌十年正月法眼ニ敍セラレ、同年十一月勅旨ヲ奉ジテ道三ト改ム、同十四年十二月法印ニ進ミ、延命院ノ號ヲ賜フ、後チ延壽院ト改ム。後チ關白秀次ニ仕フ、秀次自殺スルニ方リテ常陸國ニ配流セラレ、佐竹義宣ノ許ニ在リテ常山方ヲ著ス。慶長三年後陽成天皇不豫、諸醫治スルコト能ハズ、因テ召サレテ上洛シ藥ヲ獻ジテ立ニ愈ユ。慶長四年屠蘇白散ヲ幕府ニ獻ズ、以後毎年以テ佳例トス。寛永八年十二月十日病デ歿ス、年八十二、澁谷廣尾祥雲寺ニ葬ル。

著ス所ニ、新舊雜方藥性能毒傳心方法醫方纘墨常山方アリ。

第十九　堀杏庵

名ハ正意、字ハ敎夫、杏菴ト號ス、又杏隱トモ云フ。近江ノ人、曲直瀨正純ニ醫業ヲ受ケ、又藤原惺窩ニ從フテ經書ヲ學ビ、藤門四偉ニ數ヘラル。尾張德川源敬ニ聘セラル、法眼ニ進ム。寬永中江戸ニ來リ將軍秀忠ニ謁ス。弘文院ニ入リ諸家系譜ヲ編修ス。寬永十九年十一月二十五日卒ス、享年五十八。

第二十　岡本玄冶

初メノ名ハ宗什、後チ諸品ト改ム、玄冶ハ其通稱ナリ。京都ノ人、年十六曲直瀬玄朔ノ門ニ入リ方術ヲ學ブ、學資ノ裁トナル、玄朔ソノ女ヲ以テ妻ス。元和四年法眼ニ敍セラル、九年德川秀忠ノ醫官トナリ隔年東下ス。寛永五年法印ニ進ミ啓廸院ト號ス。寛永十三年朝鮮國使ニ接シ談論大ニ美譽セラル、十四年家光病ミ先生ノ藥ニヨリ治ス、采地千石ヲ賜フ。正保二年四月二十日病ンデ歿ス、年五十九、澁谷廣尾祥雲寺ニ葬ル。著ス所ニ、燈下集、玄冶配劑口解、玄冶方考、家傳預藥集、增補濟民記、通俗醫海、腰舟傷寒彙方規矩アリ。

第二十一　施藥院宗伯

江州ノ人、三雲三郎左衛門資隆ノ子ナリ、施藥院秀隆夭死シ嗣ナキヲ以テ、宗伯出デテ家業ヲ繼グ、豐太閤ノ侍醫トナリ法眼トナル。慶長四年法印ニ敍シ施藥院使ニ任ズ。

寛文三年七月二十七日其家ニ歿ス、年八十八、京都寺町十念寺ニ葬ル。

著ス所ニ、撮要集アリ、宗鑑ノ著スモノ先生之ヲ增補修正シテ世ニ公ニセリ。

第二十二　野間三竹

名ハ成大、字ハ子苞、柳谷、又靜軒ト號ス、玄琢ノ子ナリ。慶長十三年ニ生マル、父ノ蔭ヲ以テ法橋ニ敍シ、寛文初年御醫トナリ法眼ニ進ミ、壽昌院ノ號ヲ襲グ。延寶四年八月十七日病ンデ歿ス、享年六十九歳。

著ス所ニ、北溪合璧古今考、沈靜錄古今逸士傳、學醫通論、醫學類篇、修養篇、四時幽賞、俗語錄、病餘反古錄、竹窓漫筆、席上談、桑華紀年、本朝言行錄、本朝詩英、群馬考、望海錄、孤燈錄、備忘錄、讀書得閑編、複醫集類書アリ。

第二十三　戴曼公

名ハ竺、杭州仁和縣ノ人、萬曆丙申二月十九日生マル。少シテ拳子業ヲ學ビ、雲林龔廷賢ニ從ヒ盡ク其術ヲ傳フ、後明亂ルルヤ我ガ長崎ニ到ル。時ニ承德二年ニシテ公年五十ナリ。

周防吉川侯ノ請ニ應ジテ長防ノ間ニ往來ス、其臣池田嵩山書ヲ曼公ニ學ブ、曼公其爲人ヲ審ニシ勸メテ痘治ノ術ヲ授ク、承應二年隱元和尙東來シ大ニ法威ヲ振フ、曼公乞テ出家ヲ求メ、和尙ノ坐下ニ歸シ薙染シ、名ヲ性易ト改メ、字ヲ獨立ト曰フ、天外一間人、又天外老人ト號ス、而シテ醫ヲナスコト舊ノ如シ。云ク物ヲ濟ハ是レ佛心、道本廣大、在ラザル所ナシ、其治成方ニ規々タラズ、而モ驗ヲ得ルコト多シト云フ。

寬文十二年十一月初六日遂ニ寂ス、春秋七十七、長崎聖壽山中ニ火キ、弟子慧明其骨ヲ護送シテ、宇治黃檗山ニ葬ル。

著ス所ニ、痘疹治術傳、婦人治痘傳、痘疹百死形狀傳、痘科鍵口訣、方論正面定位圖、面部四位八隅圖、面色順逆圖、三十六面圖、唇舌常候病唇十八品、病舌三十六品、五死舌圖アリ。

第二十四　向井靈蘭

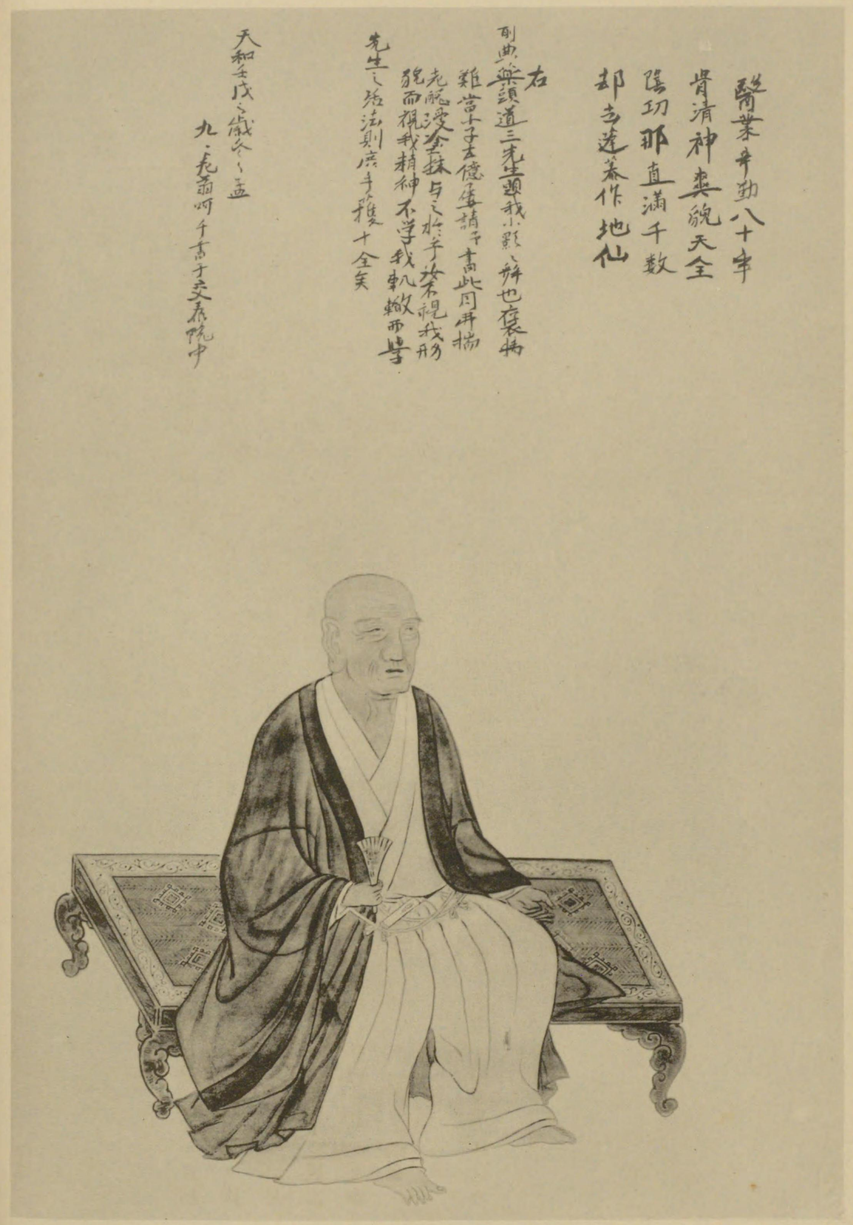
始ノ名ハ玄松、晩年元升ト更ム、字ハ素柏又以順、自ラ觀水子ト號ス、其堂ヲ靈蘭ト名ク。慶長十四年二月二日、肥前神崎郡酒村ニ生マル、父高甫病アリ長崎ニ移ル。先生年二十二、始テ書ヲ讀ミ遂ニ醫ヲ以テ業トナシ、俗ニ從テ薙髪ス。先生獨學刻苦、遂ニ其蘊奥ヲ窮ム、筑前黒田侯病アリ招テ治セシメ效アリ、俸七百石ヲ以テ召スモ應セズ。四十六歳其姑ヲ失ヒ、萬治元年先生五十歳妻子ヲ携テ京都ニ入リ家ス、直チニ伊勢大廟ニ詣テ廟前ニ於テ髪ヲ束ネ又俗服雅ナラザルヲ以テ羽徳衣ヲ創テ自ラ禮服トナス。京都ニ在ルコト日久シテ其術大ニ行ハル、先生年六十。加賀ニ赴キ家臣ノ病ヲ治ス、侯招カントスルモ老衰事ニ堪ヘザルヲ以テ辭シテ受ケズ。延寶五年十一月朔日病ヲ以テ家ニ卒ス、享年六十九、越テ十一日京都洛東鈴聲山ニ葬ル、元祿六年故アリテ其南ニ改メ葬ル。

著ス所ニ、和名本草廣求經驗祕方アリ。

第二十五　山脇玄心

道作ト稱シ、文祿三年近江、山脇村ニ生マル、後チ父松雪ニ從ヒ京都ニ移リ、慶長年中、今大路玄朔ニ入門シ、醫道ヲ學ビ、後チ福知山有馬家ニ仕ヘ、更ニ又美濃德永家ニ仕フ、又京都ニ醫業ヲ開ク。元和六年禁裏ニ召サレ侍醫トナリ、元和九年法橋ニ、寛永十四年法眼ニ、同二十年法印ニ敍シ、養壽院ノ號ヲ賜ハル。後水尾、明正、後光明、後西、靈元ノ五朝ニ奉仕ス。後水尾天皇御讓位後モ日々參內ス、勅命ニヨリ養壽錄ヲ著述シテ獻上ス、老年ノ節頭巾鳩杖ヲ賜リ、參內院參ノ節、宮中ニテ兩品使用ヲ許サル。先是德川南龍公疾アリ道作ヲ請ント欲ス、上皇遣ラズ、曰ク朕一日モ道作無カル可ラズ、道作在ラザレバ朕ガ心安カラズト。延寶六年十月八日歿ス、壽八十二。

著ス所ニ、勅撰養壽錄、原病式集解、醫方捷徑アリ。



第二十六　井上玄徹

靈叟ト號ス、慶長七年六月四日周防山口ニ生マル。年十三出デテ廣島ノ人井上豐後ノ家ヲ嗣グ、壯年京都ニ出テ醫業ヲ曲直瀨玄朔ニ受ケ、精妙ヲ得、正保四年十一月初メテ家光將軍ニ京都ニ謁シ、尋テ侍醫トナリ、俸三百苞ヲ賜フ。寛文四年十一月會津保科侯喀血ヲ患フ、玄徹命ヲ受ケ方ヲ處シ、侯ノ病忽チ痊ユ、五年十二月二十九日法眼ニ敍セラル。萬治三年男玄快ヲシテ繼ガシメ、自ラ老ヲ告ゲテ退ク、寶曆五年東福門院不豫、玄徹命ヲ奉ジテ京都ニ入リ藥ヲ獻ジテ效アリ、天皇ソノ勞ヲ賞シ玉フ。六年六月江戸ニ歸リ法印ニ敍シ、交泰院ノ號ヲ賜フ、古ヨリ一診ノ報酬銀三千挺アルモノ玄徹ト井關常甫トアルノミ。玄徹又喜デ子弟ヲ教導シ門弟千ヲ以テ數フ。

貞亨三年四月十九日病ンデ其家ニ歿ス、年八十五。地ヲ澁谷廣尾祥雲寺内師玄朔ノ墳側ニ相シ、遺言シテ此地ニ葬ラシム。

第二十七　井上玄徹（木像）

史傳　前ニ出ヅ。

賜紫袈裟前太醫令延壽院玄淵橘先生
貞享三丙寅五月二十二日壽五十一

第二十八　今大路玄淵

名ハ親俊、諱ハ玄淵、字ハ靜然、寛永十三年三月十日江戸ニ生マル、慶安四年十二月十九日典藥頭ニ敍セラレ兵部大輔ト稱ス、貞享三年五月二十二日中風ニ罹リ急死ス、年五十一。

著ス所ニ、魚目明珠・掌珠方・唐絕寄解・寶篋方・入門私考・龍金方・時齊文抄・時齋日抄・一壺集・錦惋子・杜律膚見・素問考・驚筵奇談・醫小傳・讀書漫筆・斗塵抄・蕉牕漫錄・袖裏春・艸澤便方・拙菴日抄・葵所筆錄・茅山草筆・多聞奇方・尙友堂詩抄・古文後集考・歷史日本考・陸放翁詩抄・醫戒・醫淵アリ。

第二十九　嵐山甫安

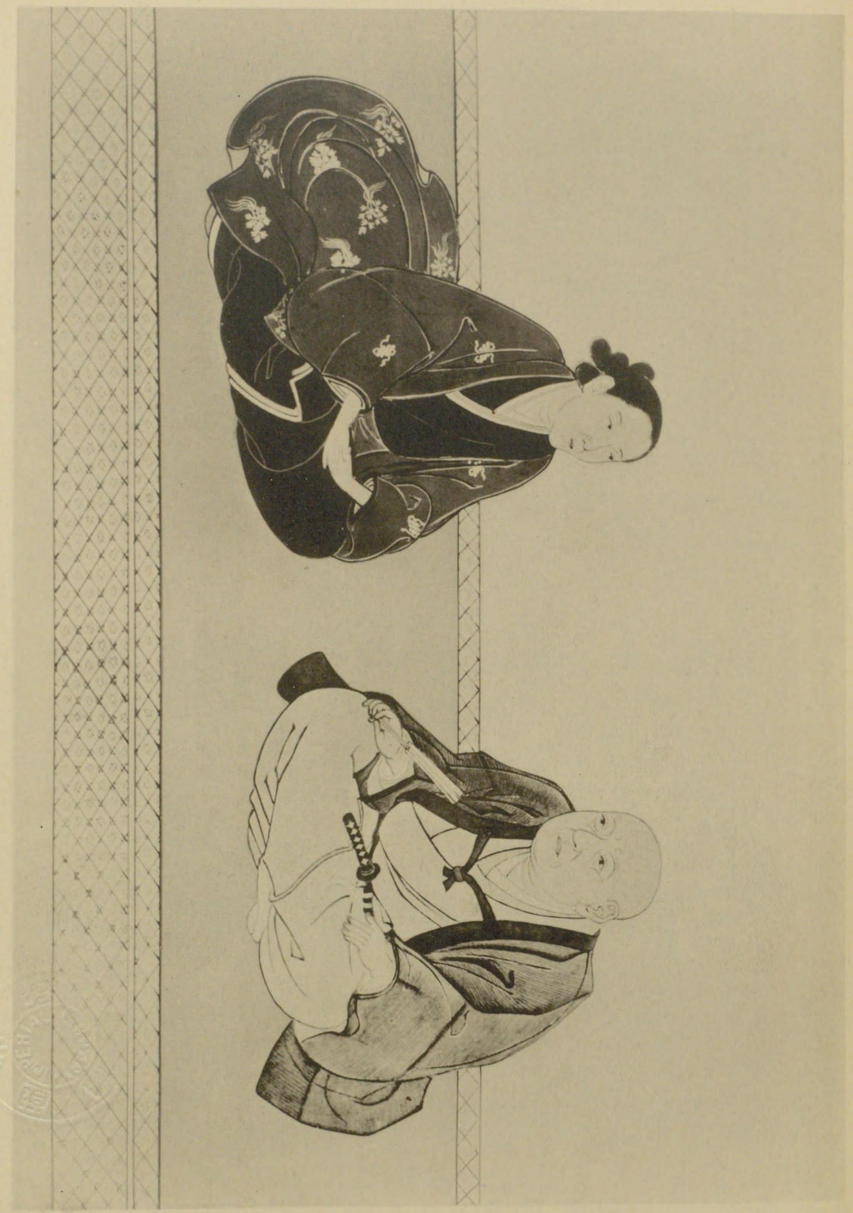
名ハ甫安又春育、初メ剞田李庵ト云フ、平戸通詞剞田三郎兵衛尉ノ二男ナリ。寛文元年二十九歳藩命ニヨリ長崎ニ行キ阿蘭陀外科學ヲ修ムルコト二年ニシテ平戸ニ歸リ、寛文四年藩ニ召サレ、延寶八年祿百石ヲ受ク。後病ヲ得、攝州有馬ニ湯治シ、京都ニ出デテ貴紳ノ治療ヲ施シ、法橋ニ敍セラル。姓ヲ改メテ嵐山甫安トス。蓋シ、治療ノ巧妙花ヲ以テ譬フベキトノ勅旨ニヨルト、元祿六年十一月三十日歿ス、享年六十一。

著ス所ニ、璧國治方類聚アリ。

第三十　杉山和一

伊勢ノ人、慶長十五年生ル、目盲ノ故ヲ以テ家ヲ義弟重之ニ譲リ、江戸ニ出デテ山瀬琢一ニ學ブ、先生鈍性ニシテ技進マズ、遂ニ其師ニ逐ハル。後チ相州江ノ島辨天神社ニ詣フ、斷食禱ルコト三十七日夢ニ神アリ、一物ヲ授ク、熟視スレバ管ト鍼ナリ、之ニヨツテ創メテ管鍼ヲ造リ其術ヲ施ス、後チ京都ニ赴キ入江豐明ニ師事シ、斯術ノ蘊奥ヲ窮ム。偶々綱吉公病アリ、和一ヲ召シテ鍼ヲ進メシム效アリ、時ニ貞享二年正月八日ナリ。元祿五年五月九日關東總錄檢校トナル。同七年五月十八日、病ンデ其家ニ歿ス、享年八十五、本所林町彌勒寺ニ葬ル。

著ス所ニ、療治三大概集醫學節要集選鍼三要集アリ、之ヲ杉山三部書ト稱ス。



第三十一　本木良意

名ハ榮久、庄太夫ト通稱ス、平戸ノ人、早クヨリ蘭語ニ通ズ。寛永十七年蘭人ノ長崎ニ移ルヤ、共ニ赴キ萬治二年平戸ニ歸ル。當時長崎ニハ未ダ通詞ナキヲ以テ奉行黒川與兵衞ノ依囑ニヨリ寛文四年更ニ長崎ニ居ヲ定ム、同八年大通詞トナリ、三十二年間ノ精勵ヨク其責ヲ盡シ、元祿八年辭職スルト共ニ新タニ通詞目付ニ召出サレ、剃髪シテ良意ト改名ス。元祿十年十月十日病ンデ歿ス、時年七十。

第三十二　鳩野宗巴（初代）

長州ノ人、中島ヲ姓トス、武ヲ棄テ醫トナリ、長崎ニ寓ス、萬治ノ初年竊ニ和蘭船ニ投ジ南蠻ニ航シ、ポストウノ門ニ入リ醫ヲ學ブコト三年、歸朝スルヤ名ヲ諸國巡覽ニ托シテ潛匿ス。偶々南蠻醫アルマンス、蘭醫カスパルノ二人幕府ノ許可ヲ得テ醫業ヲ長崎ニ開クニ會ス、宗巴往テ弟子トナル。此際肥前侯愛飼スル所ノ鳩足ヲ傷ク、之ヲ治ス效アリ、侯賞シ姓ヲ鳩野トセンコトヲ勸告ス。地方ノ人鳩ノ宗巴ト呼ブ、遂ニ自ラ鳩野ヲ冒ス。細川公客禮ヲ以テ聘ス、大阪藩邸ニ在リテ傍ラ業ヲ開ク。元祿十三年歿ス、學峰道藥老法師ニ謚ス、俗人ニシテ老法師ヲ稱スルハ多クハ人ヲ救ヒクルヲ彰スルナリ。

第三十三　松下見林

名ハ慶撰、字ハ諸生、西峰山人ト號シ、見林ト通稱ス、浪華ノ人、寛永十四年一月元旦ニ生マル。年十三、古林見宜ニ贄ヲ執リ醫學ヲ修ム、京都ニ在リテ醫ヲ業トスル傍經書ヲ講ゼリ。後チ高松侯ニ簽仕ス、延寶年間、戸田越前守忠昌、朝廷ニ奏シテ法印ノ位ヲ授ケント欲ス、先生辭シテ受ケズ。元祿十六年十二月七日歿ス、年六十七。

著ス所ニ、運氣論疏鈔、習醫規格、古林見宜翁傳アリ。

第三十四　楢林鎭山

名ハ時敏、通稱新吾兵衞、鎭山ハ其號ナリ、慶安元年十二月十四日長崎ニ生マル。幼ニシテ和蘭人ニ就テ其文字ヲ學ブ、年十八、擧ゲラレテ小通詞トナル、貞享二年六月大通詞ニ擢セラル。元祿元年蘭醫ホツフマンノ來朝ニ遭ヒ、醫學ノ疑義ヲ質シ、同五年八月年五十一、通詞ノ業ヲ子榮理ニ讓リ剃髮シテ榮休ト改メ、外科ヲ以テ業トス、楢林流外科玆ニ興ル。

寶永八年三月二十九日病ンデ歿ス、享年六十九。

第三十五　寺井玄渓

元祿十三年、赤穗城主淺野長矩ニ仕フ、江戸ノ變起ルニ及ビ、大石良雄ニ從ヒ江戸ニ赴カント請フ、良雄喜バズ、醫人ノ君ヲ交フレバ、後世、僚輩ヲ驅率シ以テ方技ノ徒ニ及ブト謂ハン、而シテ軍伍ノ間醫官未ダ嘗テ從ハザル所ナリト、玄渓遂ニ止ム。子玄達ヲ江戸ニ送リ諸士ノ疾ヲ護ラシム。正德元年歿ス。

第三十六　吉田自庵

名ハ昌全、自庵ハ其號ナリ、筑前太宰府ノ人、本姓坂田、幼ニシテ、長崎ニ赴キ、吉田自休ニ就テ南蠻外科ヲ學ブコト多年、自休已レガ子トシ、其業ヲ嗣ガシム、依テ吉田氏ヲ冒ス。元祿四年六月江府ニ仕フ、時ニ年四十八、同六年十二日法眼ニ敍セラル、奥外科トナル、寶永七年七月仕ヲ致シ、正德三年四月病ンデ歿ス。

著ス所ニ、三國流外科傳書、外科眞傳アリ。

第三十七　貝原益軒

名ハ篤信、字ハ子誠、通稱久兵衛、益軒ト號シ、又損軒ト號ス、筑前ノ人、寛永七年十一月十四日生マル。先生年十九、武州河崎宿ニテ祝髪シ、柔齋ト號シ、醫トナラントシテ向井靈蘭ニ學ブ。寛文八年三十九歳東髪シテ久兵衛ト云フ。恒ニ濟生ニ意ヲ傾ケ、後生ノ稗益トシ、著スル所ノ書多クハ國字ヲ以テシ、田夫隷卒ニ便トス。先生年七十九、大和本草ヲ撰ス。之レヨリ先キ元祿十三年先生年七十一、老ヲ告ゲテ仕ヲ致ス、猶月俸ヲ賜ヒテ其老ヲ優ス。正徳四年、手足痲痺シテ八月二十七日家ニ歿ス、年八十五、荒津金龍寺ニ葬ル。明治四十四年六月正四位ヲ追賜セラル。

著ス所ニ、大和本草、日本釋名本草綱目、和名目錄、養生訓等アリ。

第三十八　稻生若水

名ハ宣義、字ハ彰信、木下貞幹ヲ師トシ、儒醫ヲ以テ金澤侯ニ仕フ、初メ長崎ノ盧草碩本草ヲ講究シ、藥惟集要ヲ作リ、同邑福山德潤ニ授ク、德潤大阪ニ往キ其學ヲ唱フ、若水從テ之ヲ受ク。庶物類纂一千卷ヲ著ハス、又正德年間本草綱目ヲ校正シ、其誤脫ヲ補入シ、附スルニ結髮居別集ヲ以テス。正德五年七月五日、京都北小路ノ家ニ歿ス、年六十一。

著ス所ニ庶物類纂詩經小識左傳名物考、本草圖畫本別集物產目錄我土產目錄採藥獨斷、皇和物產品目炮炙全書孝女傳結髮居別集、非本草綱目指南食物本草、胡枝錄アリ。

第三十九　越智平庵

名ハ正球（一ニ正璆ニ作ル）、無方居士ト號ス、同齋ハ其別號ナリ。寛永十年正月十九日江戸ニ生マル、寛文七年父玄理歿シ、先生其家ヲ嗣グ、年二十八。近郊ニ行キ、田野醫藥ニ乏シキモノニ其業ヲ施シテ練習シ、八王子ニ三年留レリ。延寶元年召サレテ歸リ、二年直醫トナリ、七年法眼ニ敍シ、天和二年十一月十八日侍醫トナリ、元祿元年法印ニ敍セラル、采地千九百石ニ至ル。

享保六年十一月先生老ヲ以テ其職ヲ辭スルニ當タリ、黄金一千枚ヲ賜ハル、同九年七月家ヲ其子ニ讓ル、同十一年十二月十三日歿ス、年八十五、麻布天眞寺ニ葬ル。

第四十　山脇玄脩

道立ト稱シ、三宅宗理ノ男ナリ、承應三年ニ生マル、山脇玄心ニ養ハル、由テ山脇氏ヲ冒ス。延寶四年法橋ニ、翌五年法眼ニ敍セラレ、同六年十二月家督ヲ襲グ。享保十二年十月二日歿ス、年七十四京都誓願寺ニ葬ル。

著ス所ニ本草附方分類、醫方魰鑑アリ。

第四十一　後藤艮山

名ハ達字ハ有成、俗稱左一郎、一ニ養庵ト號ス。寓治二年七月二十三日江戸常磐橋ノ僑居ニ生マル、艮山幼ニシテ聰明、性至孝ニシテ父母ニ仕ヘテ忻歡ヲ盡ス。是ノ時江戸頻年火災アリ、十一年間ニ七タビ燒カル、父京都ニ移リ安居ヲ求メント欲ス、艮山乃チ父母ヲ奉ジテ京都ニ來ル、時ニ二十七。艮山慨然トシテ歎ジテ曰ク、我レ儒タンカ伊藤仁齋ニ上タリ難シ、已ムナクンバ卽チ醫乎、豪傑ノ士先鞭ヲ著クルモノアルナシト。茲ニ於テ、錢一貫文ヲ贄トシテ名古屋玄醫ノ門ヲ訪フ、玄醫其贄ノ薄ク、家規ニ合ハザルヲ以テ見エズ、艮山憤懣門ヲ出デ玄醫鼠輩人ヲ知ラズト罵ル、艮山之ヨリ奮起勤勉醫ヲ業トシ、廿年間盛ニソノ術行レ、診ヲ乞フモノ其門ニ滿チ、弟子凡ソ二百人ニ及ベリ。

之ヨリ先キ、醫人皆髮ヲ剃リ僧衣ヲ著ケ僧官ヲ拜ス、艮山之ヲ憎ミ、幡然髮ヲ束ネテ縫春ヲ服シ、蒼姓ニ復シ、後藤佐一郎ト稱ス、後チソノ風儀ヲ慕フモノ多ク、醫人ノ束髮スルモノヲ後藤流ト稱セラル。

艮山ノ學ハ古方學ニシテ、一氣留滯論ヲ唱ヘ、順氣ニ因ルベキヲ治法ノ綱要トセリ。又艮山ノ病ヲ治スルニ灸ヲ用ヒ、溫泉ヲ利シ、熊膽ヲ好メリ、世俗呼デ湯熊灸庵ト曰ヘリ。

第四十二　香月牛山

名ハ則眞、字ハ啓益、筑前ノ人、少クシテ貝原益軒ニ學ビ、又鶴原玄益ニ從フテ方伎ノ書ヲ受ク。壯ナルニ及ビテ中津侯ニ仕フ、居ルコト十四年、後京都ニ遊ブ、居ヲ二條ニトシ、刀圭ヲ業トス。先生妻妾ヲ蓄ヘズ、子ナシ、門人則道ヲ嗣トス。元文五年歿ス、年八十五。

著ス所ニ、螢雪餘話、牛山方考、醫學鉤玄、國字醫叢、婦人壽草、小兒必要記、老人養草、習醫先入アリ。

第四十三　松岡恕庵

名ハ玄達字ハ成章、別ニ怡顔齋ト號ス、平安ニ生マル、初メ山崎闇齋ニ從ヒ、伊藤仁齋ニ學ブ、稻生若水ニ就テ本草綱目ヲ問ヒ、該通セザルハ無シ。當時物産家後藤常之進アリ時ニ鳴ル、而シテ先生ノ聲譽遙ニ其上ニ出ヅ、當時服部南郭ノ儒名一時ニ擅キ生徒甚ダ多シ、而シテ先生ノ本草ヲ講ズルヤ南部ノ講筵ニ匹敵シテ門外市ヲ成セリト云フ、時人推シテ本草ノ大家トナス。

先生天稟淳朴、儉素自ラ處ス、其男善吾幼ヨリ長ズルマデ絹衣ヲ用ヒズ、其袴ハ麻布ヲ用フ。門生見ルニ忍ビズ好袴ヲ贈ル、先生之ヲ見テ曰ク吾レ仁齋先生ノ講席ニ侍スル時、東涯猶幼ニシテ白木綿ヲ衣、白綿袴ヲ着ク、善吾ノ染衣ヲ着クルモ猶且奢ナリト、終ニ之ヲ着セシメザリキ。延享四年病デ其家ニ歿ス、其子善吾嗣ク。

先生ノ著ス所多シ、千金方藥註五卷、本草一家三卷用藥須知三卷用藥須知後篇四卷用藥須知續篇三卷食療正要四卷日用食性捷徑一卷本草彙言摘要四卷結毘錄三卷櫻品一卷梅品一卷廣參品一卷竹品一卷喜品一卷菌品一卷詹々言二卷毛詩名物參解四卷アリ。

第四十四　香川修菴

名ハ修德、字ハ太冲、修菴ハ其號ナリ、播州姫路ノ人、後チ籍ヲ京都ニ占ム、業ヲ伊藤仁齋ニ受クルコト五年業大ニ進ミ、門下推シヲ高等トナス。又醫ヲ後藤艮山ニ學ビ、其奥義ヲ窮ム、夫ノ素靈ノ說ヲ廢シ以テ一家ノ言ヲ立ツ其意以謂ラク聖道醫術其本ヲ一ニシテ二致ナシト、遂ニ其堂ヲ名ケテ一本ト曰フ。藥選行餘醫言ヲ著シテ以テ師說ヲ推衍シ、醫道益々闢ク、溫泉及ビ灸炳ノ治效ニ於テ最モ詳ニ致ス。修庵儼恪至性アリ、幼ニシテ父ヲ喪ヒ朝起毎ニ躬ラ祠堂ヲ洒掃シ、拜跪一ニ生ニ事ルガ如ク、老ニ至ルマデ變ラザリキ。寶曆五年播州ニ赴キ、京ニ還ラントシ、二月十三日病ンデ丹波古市邑ニ歿ス、年七十三。

第四十五　野呂元丈

名ハ實夫、字ハ元丈、連山ト號ス、字ヲ以テ稱ス。元祿六年伊勢ニ生マル、本姓高橋氏、出デテ野呂三省ノ嗣トナル、山脇玄修ヲ師トシ、旁ラ並河天民稻生若水ニ就ク、尤モ本草ヲ好ム、若水門下出藍ノ目ナリ。後チ江戸幕府醫官トナル、又石藥ヲ長石ノ二州ニ採リ其探討海內ニ遍シ、更ニ清國ニ遊バント請フ許サレズ、居常快々タリ。頭瘍ヲ疾ンデ寶曆十年三月十四日歿ス、芝高輪泉岳寺ニ葬ル。

著ス所ニ狂犬咬傷治方、佛石石碑考、和蘭陀本草和解アリ。

第四十六　奥村良竹

名ハ直、南山ト號ス、貞享元年越前府中ニ生マル。良竹年十三、山崎良伯ニ就キテ醫ヲ學ビ、居ルコト四五年、後チ去テ大阪ニ赴キ豪商ニ客タリ居ルコト八年、良伯ノ子某歿ス、良伯齢老ヒ孫幼ナリ、乃チ書ヲ寄セ良竹ヲ招テ歸ラシメ、其孫良彈ヲ教育セシム。良竹既ニ醫家ノ大義ニ通ズ、是ニ於テ研鑽益々力メ名大ニ籍リ、府中本多侯三女アリ、倶ニ痘ニ罹リ勢頗ル危シ、良竹藥ヲ進メテ效アリ、既ニシテ良伯歿シテ良彈既ニ弱冠、良竹乃チ家有スル所ヲ推シテ悉ク之ニ與ヘ、單身出デテ居ル、府中侯祿セントス、良竹謝ス。良竹ノ父年老ユ、良竹ニ謂テ曰ク、男兒四方ノ志アリト、然レドモ貧米俸檄亦皆親ノ爲ニスト、貴人ノ禮命スル所豈終ニ辭スベケンヤト、良竹乃チ其命ヲ拜ス。府中侯ノ女岩倉源公ニ適ク、良竹從テ京ニ入ル、既ニシテ歸國ス、治效益々著シク聲名遠ク走セ、四方ヨリ來リ學ブモノ、診ヲ乞フモノ日ニ頗ル多シ。良竹著書ヲ好マズ、人或ハ勸ムルニ書ヲ著ハスヲ以テス、良竹微笑シテ曰ク醫家道先達論ジテ具レリ、舉ゲテ之ヲ行フノミ、何ゾ名ニ拘ルコトヲナサントト。

寶曆七年ノ春、良竹卒然痔ヲ病ミ、常ニ床蓐ニ在リ、而シテ子弟ト方ヲ講ジ啍々トシテ已マズ。十一年八月暴冷ニ傷ミ、九月三日遂ニ逝ク、年七十五、平吹村先塋ノ傍ニ葬ル。

第四十七　山脇東洋

諱ハ尚徳、字ハ玄飛、一字ハ子樹、初メ移山ト號シ、後東洋ト改ム。本姓清水氏、年十三ニシテ能ク文ヲ屬シ、又始メテ醫ヲ學ビ山脇玄修ニ朝夕ス、年十八ノトキ生父東軒歿ス。玄修老テ子ナシ、享保十一年先生ヲ養フテ嗣トス、明年七月玄修歿ス、翌日其業ヲ嗣グ、時ニ年二十三。先生專ラ古醫道ヲ唱道セリ。

寶暦四年二月七日、刑ヲ洛ノ西郊ニ行フアリ、官ニ請フテ之ヲ解ク、先生就テ其眞ヲ觀、圖志ヲ作リ名ケテ藏志ト曰フ、實ニ觀藏ノ圖志ハ先生ヲ以テ嚆矢トス。當時世醫晏然トシテ之ヲ難シ、刑囚ノ屍ト雖屠テ之ヲ觀ルハ慘酷トセリ、先生敢テ之ヲ意トセズ。更ニ同八年十月再ビ刑屍ヲ解剖セリ。

先生外臺秘要方ヲ校刊セント志シ、延享二年北野天滿宮ニ詣デテ祈リ且ツ誓フ、翌年十月刻成ル。先生ノ名海内ニ滿チ四方來リ學ブモノ數百人、先生規則十條ヲ作リ養壽院醫則ヲ著シ之ヲ子弟ニ示セリ。

寶暦十二年八月六日、鷹司右府ノ病ヲ療センガ爲メニ其殿ニ宿シ、夜ニ至リ俄ニ病起リ、翌七日輿シテ家ニ歸リ一日ヲ越エテ歿ス、享年五十八。

第四十八　井上稚川

名ハ方正、俊良ト稱ス、幕府醫官法眼杉浦玄徳ノ子ナリ、井上交泰院玄徹ニ養レテ嗣トナル。寛保元年十二月法眼トナリ、寛延元年十二月法印ニ進ミ、寶暦二年五月西城侍醫トナル。

望月三英、博學精通ヲ以テ當時江都醫家ノ巨擘タリ、先生ヲ稱シテ曰ク、俊良素ト英傑、學古義ヲ究メ博覽强記、凡ソ天下ノ經籍事物、一タビ目擊スルニ及ベバ終身遺忘スルコトナシト、亦奇ナル哉。其大人玄徳翁夙ニ方術ヲ以テ鳴ル、性祕方ヲ嗜ミ、廣ク世ニ求メ、其經驗ヲ取テ之ヲ試ム、手ニ隨テ應ゼザルモノナシ、是ニ於テ聲名籍甚タリ。翁モト眼ヲ失ヒ、終ニ明ヲ失フ、然モ猶孜々トシテ休マズ、卽チ俊良ヲシテ相扶ケ相携ヘテ、病家ニ至リ共ニ俱ニ診視處劑セシム。是故ニ俊良ノ揣摩鍛煉弱冠ニシテ已ニ遠ク老醫ノ上ニ出ヅト。明和元年八月八日病ンデ歿ス、年六十六、廣尾祥雲寺ニ葬ル。

著ス所ニ、醫方精要アリ、門人尾張醫官竹田恭明刻シテ世ニ行フ。

第四十九　御園中渠

名ハ常彧、字ハ文卿、名ハ中渠ト號ス、意齊流鍼術常心五世ノ孫ナリ。寶永三年七月十五日京都ニ生マル。醫方ヲ淺井東軒ニ受ケ、鍼法ヲ父常倫ニ學ビ、年二十三歳享保十三年、鍼師六品ヲ拜シ、翌年主計權助トナリ、又偶髪ヲ許サル、朝家醫官偶髪ノ始ナリ。元文四年五品ニ擢ゲラル、寶暦十四年四品ノ位ヲ受ク。明和元年八月八日其家ニ歿ス、享年五十九。

第五十　青木昆陽

名ハ敦書字ハ厚甫昆陽ト號シ、文藏ト通ス。元祿十一年ニ生マレ、享保二十年蕃薯考ヲ著シ、將軍吉宗ニ知ラレ、元文四年三月八日出仕シテ御書物御用達トナリ、其翌年寺社奉行支配トナレリ、延享元年長崎ニ赴キ、更ニ深ク和蘭學ヲ學ビ之ニ精通セリ。明和六年十一月十二日病ンデ歿ス、時年七十二。

著ス所ニ、和蘭貨幣考和蘭話譯和蘭話譯後集和一角考、和蘭文字略考、和蘭文譯、和蘭勸酒歌解蕃書考アリ。

第五十一　吉益東洞

名ハ爲則、字ハ公言、通稱周助、安藝廣島ノ人、元祿十五年五月某日ヲ以テ生マル。年十九家ヲ興スコト醫ニアルヲ悟リ、津祐順ニ從ヒ金瘡外科ヲ學ビ、刻苦研精日夜已マズ、素難以下百氏ノ書ヲ爛讀セリ。偏隅ノ地ハ志土ノ伏處スベキ所ニ非ラズトテ、父母女弟ヲ從ヘテ京師ニ徙リ、萬里小路春日町南入ニ居リ、古醫方ヲ唱フ、時ニ元文三年春三月年三十七ナリ。姓ヲ吉益氏ニ改ム、先生抱負甚大ナレドモ時流未ダ信ゼズ、弟子ノ籍ニ入ルモノナク、業行ハレズ、加之盜ニ遇ヒテ貲財略ボ盡キ貧困日ニ甚シ、紙泥木ヲ以テ偶人ヲ造リ市ニ鬻ギテ僅ニ衣食ヲ給ス、其友村尾氏之ヲ憐ミ佐倉侯ニ薦メントス、先生曰ク窮達ハ命ナリ、何ゾ憂フルニ足ラン、天斯道ヲ喪ハザラントセバ我ヲシテ飢死セシメジ、貧困窮乏スルモ豈ニ吾志ヲ降シテ祖先ヲ汚辱センヤ。年四十三ニ至リ貧益甚シク米櫃屢々空シ、シカモ先生ノ志少シモ悛マラズ、一日憤然決スル所アリ、齋戒斷食スルコト七日、五條ノ少名彦ノ神社ニ詣ヅ。適其友賈翁、彼ガ窮ヲ見テ金ヲ貽ル、先生之ヲ辭ス、賈人勃然トシテ色ヲ作シテ曰ク先生ノ爲ニ非ラズ、天下萬人ノ爲ナリト、翁感激之ヲ受ケ家資漸ク給ス、後チ某病家ニ於テ時ノ名醫山脇東洋ニ會シ共ニ處方ヲ論ジテ、大ニ推服セラルル所トナリ、之レヨリ世ニ出ヅ、年四十五。東洞院街ニ移ル、東洞ノ號ハ蓋シ此ニ取リシモノナリ。東洞ハ素靈傷寒ニ其說ヲ選ビ、五行經絡溫補ノ陋說ヲ排シ、萬病一毒論ヲ立テタルモ、其言少シク驕激ニ失シ、當時醫ノ之ヲ評スルモノ多シ。寶曆ノ初メ門人鶴元逸其說ヲ集メテ醫斷ヲ著ハシテ公ニスルヤ、海內一時之ヲ是非スルモノ普ネカリキ。寶延四年、年五十、類聚方ヲ選ビ、又方極一卷ヲ作リテ其門ノ方鑑トナシ、又藥徵三卷ヲ出版セリ。東洞ノ醫流天下ニ弘ク行レ奧羽肥藩所トシテ行ハレザルハナカリキ。

安永二年、九月病ンデ歿ス年七十二、京都東福寺內莊嚴院ニ葬ル。先生ノ門ニ俊傑ノ士多シ、村井杶、帆足通、楨中西惟忠、岑少翁、瀨丘涎、鶴元逸、田中榮信、山邊常卿、桃井安貞、稻垣辨藏ハソノ門ノ高足トス。

第五十二　賀川玄悦

名ハ玄悦、一ノ名ハ光森、字ハ子玄、本姓三浦氏、世ニ彦根侯ニ仕フ。先生庶子ナリ、藩法ニテハ庶子ハ祿ヲ襲グコトヲ得ザルヲ以テ七歳ニシテ、母家賀川氏ニ養ハレテ其姓ヲ冒ス。先生畎畝ノ間ニ老死スルヲ欲セズ、去リテ京都ニ往キ、按摩ノ技ヲ賣リテ自給シツツ古醫方ヲ學ブ。年四十餘ニシテ、隣家ノ婦娩シ難キニ遇ヒ、構思反覆忽チ一法ヲ得、卽チ提灯ノ柄ノ鐵鈎ヲ以テ胎ヲ扼ケテ之ヲ挽出シ、姙婦爲ニ免カル、更ニ之ヲ數人ニ試ミ、皆其意ノ如キヲ以テ益之ヲ精思シ、終ニ若干術ヲ創唱シ回生術トセリ。先生產前七十五難產後百二十五難ヲ著ハシテ一家ノ言ヲ立テ名ケテ產論ト云フ、其說獨創ニシテ親歷セシ所ナリ、時ニ六十七歳ナリ。明和五年、阿波侯ノ聘ニ應ジ士籍ニ入リ秩百石ヲ食ム。安永六年九月十四日家ニ卒ス、時ニ年七十八、門人謚シテ景定先生ト云フ。先生ニ二子アレドモ事ヲ以テ逐ヒ、岡本玄廸ヲ養ヒテ嗣トス、其子滿貞ニ至リテ大成ス。

先生人トナリ魁梧ニシテ膂力人ニ過ギ、手指至テ細長之ヲ用フルコト亦巧ニ、指頭甚力アリ、其術從テ絕妙ナリト稱ス。皇后御產ノ時難娩ニシテ諸醫治スル能ハズ遂ニ先生ヲ召ス。先生一診手術スベキヲ云フ、奏者乃チ醫案ヲ徵ス、先生元來目ニ一丁字ナシ、因テ學文技術一ニアラザルヲ論ジ且ツ曰ク子宮口圍凡四寸五分、指ヲ其中ニ入レ探究ス、之ヲ手術ト云フ。請フ一竹片太サ四寸五分長サ一寸許ノモノヲ與ヘヨト、奏者ヲシテ之ヲ執ラシメ、其指ヲ以テ筒中ヲ過ギ席上皿中ノ饅頭ヲ撮ミ盡ク之ヲ收ム、衆相顧ミテ肅然タリ、終ニ治ヲ先生ニ托セリト。

先生初メ產論ヲ著ハストキ、其友皆川淇園之ヲ潤色シテ世ニ出シ大ニ行ハル、先生淇園ヲ見ル每ニ泣拜シテ謝セリト。

第五十三　賀川玄迪

字ハ子啓、秋田ノ人、本姓岡本氏。年二十四遊シテ京都ニ赴キ賀川玄悦ノ門ニ入ル、玄悦其才能ヲ愛シ子養シ、女ヲ以テ之ニ配シ家ヲ嗣シム。玄悦晩年阿波侯ノ徴ニ遇ヒタルトキ、先生ヲシテ己ニ代ラシム。先生能ク家父ノ偉業ヲ繼承シ、別ニ發明補翼スル所多シ。安永四年產論翼ヲ著シ、產論ノ說ヲ詳ニシ、又ソノ言ハザル所ヲ言ヒ、賀川氏ノ學術復タ餘蘊ナシトス。安永八年十月病デ歿ス、年四十一。

第五十四　平賀源内

享保十四年讃岐志度ニ生マル、年十三藩醫三好某ニ從テ醫ヲ學ビ本草ヲ好ム。年十九、藩主ノ近侍ニ仕ヘ休慧ト呼バレ、後チ鳩溪ニ改ム。年二十四長崎ニ至リ蘭學ヲ學ビ年餘ニシテ大阪ニ出デテ戸田旭山ニ就ク、明和七年年四十二、再ビ長崎ニ遊ブ、電氣器械ヲ見テ之ヲ模造セリ。時ノ執政田沼意次ニ取リ入リ出身セントセシモ重用セラルルコトナク、久シク市ニ在リテ浪人トナル。安永八年十一月暴ニ其門人ノ一人ヲ斬リ、翌年病ンデ獄中ニ死セリ、享年四十九。友人杉田玄白私財ヲ擲却シテ墓ヲ淺草橋場總泉寺内ニ建ツ。

著ス所ニ物類品隲・火浣布圖說・五百介圖・食物本草・神農本草經圖註・並和名考・本草木石・禽獸魚介蟲譜アリ。

第五十五　瀬丘長圭

名ハ珽、字ハ長圭、江戸ノ人、天明元年二月十四日歿ス、年四十九。
艮山曩キニ按腹候背ノ二法ヲ說キ、香川・吉益々々腹候ノ術ヲ恢弘セリ、先生出デテ專ラ力ヲ腹診ニ用ヒ、益々其徽旨ヲ闡明セリ。
著ス所ニ診極圖說アリ。

第五十六　山科厚安

字ハ元溫、南澗ト號ス、享保十四年京都ニ生マル。延享元年、年十六召サレテ宮廷ニ入リ、翌年法橋ノ位ヲ賜ヒ、父宗安ト共ニ朝ニ升ル。寛延元年法眼ニ進ミ、寶曆五年二十七ニシテ法印ニ敍セラル光格天皇ノ尙藥ヲ掌レリ。天明元年八月病ンデ歿ス、享年五十三。三十ヲ踰ズシテ法印ノ位ニ陞ルモノ先生ヲ以テ初メトス。

第五十七　惠美三白

名ハ貞榮、字ハ子幹、寧固ハ其號ニシテ、三白ハ通稱ナリ。本姓ハ堤氏、安藝廣島ノ人、幼ニシテ父母ヲ失フ、家貧乏資ナキヲ以テ伊豫ノ人惠美良玄ニ養ハレテ惠美氏ヲ冒ス。數年後玄良死ス、三白既ニ長ジ遺篋ヲ啓キ偏ク醫書ヲ讀ミ日夜研究ス。當時吉益東洞京都ニ在リ、萬病一毒説ヲ唱フ、三白之レト所論シ往々ニシテ合ス、東洞推シテ一俊人トシ、相共ニ切劘シ得ル所少カラザリキ。三白喜ンデ奥村良筑ノ吐方ヲ用ヒ大ニ行ハレ、安藝侯數々謁見ヲ賜フ、後苞二百俵ヲ下シ世襲トナサシム。天明元年十月八日疾デ卒ス、年七十五、廣島專勝寺ニ葬ル。

第五十八　建部清菴

奥州一ノ關ノ醫官ニシテ、享保十五年江戸ニ出テ小松壽哲ノ門ニ入リ、父祖ノ業ヲ嗣テ外科ヲ修メタリ。杉田玄白ノ江戸ニ在リテ蘭書飜譯ヲ創始セシヲ聞キ、其子由水及ビ門人大槻玄澤ヲシテ江戸ニ出ダシ、杉田ノ門ニ入ラシム。玄澤大成シテ其師ノ偉業ヲ恢弘セリ。

天明二年三月八日病デ歿ス、享年七十一。

著ス所ニ、民間備荒錄アリ。

第五十九　松平君山

名ハ秀雲、字ハ士龍、君山ハ其號ナリ、別號ニ龍吟子、富春山人、盍簪窩主人アリ、尾張ノ人。元祿十年三月二十七日生マル、本姓千村氏、長ジテ松平久忠ニ養ハレ嗣ヲ襲ギ、松平氏ヲ冒ス。先生別ニ學師承ナク、一ニ獨學力行ニ出ヅ。

天明三年四月十八日病ンデ逝ク、享年八十八。

著ス所ニ、本草正譌、孝經直解、三世唱和、弊帚集、初編アリ。

第六十　山脇東門

諱ハ陶字ハ大鐘東門ハ其號ナリ、幼名ヲ阿藤ト云フ、後チ玄侃ト改ム、東洋ノ第二子ナリ。延享三年十一歳ノトキ父ニ從ヒ參內シ、寶暦十二年十一月父ノ官職ヲ襲ヒ、明和三年六月法眼ニ進ム。明和八年十二月獄舍ニ於テ一婦人屍ヲ解剖シ、更ニ安永四年八月一婦人屍ヲ、其翌年又男子屍ヲ剖キテ大ニ治療ニ稗益セリ。

先生年十七ノトキ父翁ノ命ニヨリ永富獨嘯庵ト共ニ越前府中ニ赴キ、奥村良筑ニ就キ吐方ヲ學ブ。先生後チ刺絡ノ說ヲ唱導セリ。

天明二年七月二十九日、病ヲ以テ其家ニ歿ス、享年四十七。

第六十一　淺井圖南

名ハ政直、賴母ト稱ス、字ハ維寅、圖南ハ其號ナリ、又幹亭、篤敬齋ト號ス、寶永三年十一月十三日、京都東洞下立賣ノ家ニ生マル。享保十一年先生年二十一、父東軒尾張公ノ聘ニ應ジ名古屋ニ赴カントス、先生隨行ヲ肯ゼズ、曰ク吾祖策庵業ヲ京都ニ起セシヨリ玆ニ百年、海內ノ醫家來リ學バザルハナシ、今父子共ニ東セバ孰カ敢テ其業ヲ承ガンカ、幸ニ一妹アリ婿ヲ撰デ嗣トナサバ後ヲ承クルニ足ラント。先生是ヨリ獨學勤苦、且ツ弟子ヲ率ユ。年三十ニシテ醫業稍行ハレ、諸公卿ノ家ニ出入シ皆待ツニ儒士ヲ以テス。寬保二年金匱要略ヲ校シ、三年外科正宗ヲ校シ、延享四年山脇東洋ガ校刻セシ外臺祕要ノ誤謬ヲ駁シ砭脇錄ヲ著セリ。寶曆三年、東軒病デ歿ス、東軒ノ養嗣政庵、年少ニシテ無賴ナリ、尾張ノ執政竹腰氏先生ヲ召ス、先生辭スルコト能ハズ、其九月名古屋ニ移サレ、父祿四百石ヲ襲グ、醫ニシテ髮ヲ蓄フルコトヲ許サル。明和三年扁倉傳割解二卷ヲ著ス。先生又畫ヲ善クス、宮崎筠圃、御薗中渠、山科宗菴ト共ニ平安四竹ノ稱アリ。明和九年四月、年七十五ナルヲ以テ致仕ヲ乞ヒ、長子正路ヲ京師ヨリ招ク、天明元年正路先ヅ歿ス、十二月國侯復タ擧ゲテ醫官トス。二年八月五日暍ヲ病デ歿ス年七十七。

第六十二　三浦梅園

名ハ晋、字ハ安貞、梅園ト號ス、別ニ攣山・孖山・洞山・季山ノ稱アリ。豐後杵築ノ人、祖父轍山以來醫ヲ家業トス。綾部絅齋ニ學ブ、年十七藤田教所ニ師事ス、年三十玄語十餘萬言ヲ著シ、又贅語・敢語ヲ作ル、之ヲ梅園三語ト稱ス。天明三年藩主ヨリ家老ノ禮ヲ以テ迎ヘラル。寛政元年三月十四日病ンデ家ニ歿ス、享年六十七。

第六十三　田中張海

名ハ榮信字ハ愿仲、播州ノ人、幼ニシテ其父ニ從ヒテ業ヲ修メ、稍長ズルニ及デ吉益東洞ノ門ニ入リ苦學多年、鄉ニ歸テ業ヲ開ク。後チ季子榮忠及ビ門人數名ヲ率テ大阪ニ出ヅ、聲譽日ニ加レリ。寛政四年十一月十六日病ンデ浪華客館ニ歿ス、享年六十一。

著ス所ニ辨斥醫辨溫古堂醫譚長沙證彙傷寒論逢原引經斷古醫語纂要アリ。

第六十四　賀川有齋

玄吾ト稱シ、諱ハ滿卿、字ハ德夫、有齋ハ其號ナリ、父翁ニ肖タリ、繼母ト和セザルノ故ヲ以テ出デテ別ニ家ヲ成ス。有齋先生初メ家貧ニシテ術亦未ダ行レズ、一日某家ノ婦難產タリ、衆醫手ヲ束ネテ爲ス所ヲ知ラズ、先生ヲ招ク。先生乃チ衆醫ヲ睥睨シテ大ニ救護ノ術ヲ論ズ、時ニ官醫福井丹波守亦坐ニアリ、先生ノ言ヲ聞テ大ニ服シ推奬措カズト。寬政五年三月二十一日病ヲ以テ其家ニ歿ス、享年六十歲。

著ス所ニ產科紀聞アリ。

第六十五　本木仁太夫

名ハ良永、字ハ士清、初メ榮之進ト稱ス、蘭皐ト號ス。良意ノ孫ナリ。寛延元年年十四、通詞見習トナリ、傍ラ佛語・羅甸語ヲ能クス。延享元年幕府西書ヲ許セシヨリ、天文・地理・醫學・本草ニ亙リテ研究洞察盡サザルハナシ。安永三年幕命ニヨリ天地二球用法ヲ譯ス、當時飜譯初期ニ屬シ譯解ニ甚ダ苦ムモ遂ニ之ヲ大成セリ。寛政六年七月十七日歿ス、享年六十。

第六十六　楢林崌山

名ハ高茂、字ハ伯由、通稱榮哲、崌山ハ其號ナリ、元文二年長崎ニ生マル、九歳ニシテ父ヲ喪フ。天明四年佐賀侯ノ醫官トナリ、寛政八年老ヲ以テ其官ヲ辭シ、嗣榮建ヲシテ嗣ガシム。九年六月二十六日病デ歿ス、年六十一、浦上村聖德寺先塋ノ次ニ葬ル。

第六十七　宇田川玄隨

名ハ晋、字ハ明卿、槐園ト號ス、津山侯ノ侍醫ナリ。年十三未ダ書ヲ讀マズ、母其時ニ及バザランコトヲ恐ル、子嬰曰ク男子書ヲ讀バ自ラ奮起スベシ、强ユルニ咿唔ヲ以テスルハ乃翁ノ心ニ在ラズト、幾モナクシテ玄隨請テ孝經ノ句讀ヲ受ケ、精思日進ス、年十五已ニ詩文ヲ以テ穎ヲ社友ノ間ニ露ス。年二十五甫メテ和蘭ノ學ニ從フ、玄隨ノ家三世儒醫ヲ以テ君ニ仕フ、旣ニ儒學醫方ニ精シク又和蘭ノ學ニ通ジ、業ヲ務ムルコト益々篤ク、書ヲ著スコト益々多シ、名聲大ニ起レリ。晩年日本橋茅場町ニ僑居ス、宅中槐樹アリ蔭ヲナス、故ニ門人相稱スルニ槐園先生ヲ以テセリ。桂川甫周、玄隨ノ才ヲ愛シ、嗟嘆シテ曰ク遠西ノ學今ニシテ傳フルニ足ルト、又蘭人某所撰ノ內科書ヲ取テ之ヲ玄隨ニ授ケテ曰ク、之ヲ譯シテ公行セバ、則チ東方未曾有ノ業ナリト、玄隨此言ヲ聽テ大ニ然リトナシ、鑽研習讀、殆ンド十年ヲ經テ西說內科選要ヲ著ス、之レヲ和蘭內科書ノ嚆矢トス。晩年此書ニ重訂ヲ加ヘ平直ヲ旨トシ、務メテ治療ノ準則ヲ揭示セントシ、旣ニ稿ヲ起セシモ、未ダ脫セズシテ溘焉トシテ簀ヲ易ク。其嗣玄眞遺緒ヲ嗣ギ、增補重訂內科選要ヲ世ニ公セリ。

寛政九年十二月十八日病ンデ歿ス、享年四十三。

著ス所ニ、遠西名物考、東西病考、遠西草木略、西洋醫言、蘭畝似載、蘭譯辨髦、西文短槐塾文府、槐園文集アリ。

第六十八　吉雄耕牛

名ハ永章、俗稱幸左衞門、後幸作ト改ム、耕牛ハソノ號ナリ。長崎通事ノ旁ラ外科ノ業ヲ好ミ、西醫ニ就テ其方術ヲ受ケ、以テ名アリ。能ク子弟ヲ敎導シ、四方ヨリ笈ヲ負フテ其門ニ入ル者數十百人ニ及ブ。每歲江戸來聘ノ和蘭使節ニ從ヒテ都下ニ來レリ。明和ノ初メ前野良澤、長崎ニ至リ專ラ西學ノ一端ヲ質問シテ其學ノ端ヲ啓ケタリ。晩年職ヲ辭シ薙髮シテ耕牛ヲ以テ隱居ノ常ノ稱トセリ。寬政十二年庚申八月十六日、年七十七病ヲ以テ家ニ終リ、禪林寺ニ葬ル。

著ス所ニ因液發備二卷アリ。

第六十九　本居宣長

鈴屋ト號ス、始メ小津富之助ト云ヒ、彌四郎健藏春庵ト稱シ、後チ中衛ト改ム、伊勢松阪ノ人。享保十五年六月七日ニ生マレ、京都ニ留學シテ堀景山ニ師事シ、更ニ醫學ヲ武川法眼ニ受ク、業成リ歸鄉、治ヲ施シ、併セテ子弟ヲ敎授ス。

享和元年九月二十九日病シテ歿ス、享年七十二、山室妙樂寺ニ葬ル。

第七十　前野蘭化

名ハ熹、通稱良澤、字ヲ子悅ト云ヒ、樂山ト號セリ。家世々醫ヲ以テ中津侯ニ仕ヘテ二百石ヲ領セリ。幼ニシテ父母ヲ失ヒ外舅淀侯宮田全澤ニ養ハレテ成長セリ。一日同藩ノ隱坂江鷗蘭書ノ殘篇ヲ先生ニ示シタルニ發憤シテ、青木昆陽ノ塾ニ入リ、日夜孜々其書ヲ學ビタリ、時明和六年ニシテ其齡四十七ナリ。其翌年藩侯ニ從ヒ中津ニ赴クコトアリシカバ、百日ノ暇ヲ得テ長崎ニ遊ビ、昆陽ヨリ傳ヘラレタル五百餘言ノ外ニ又二百餘言ヲ誦シテ江戸ニ歸レリ。其翌年明和八年三月四日、杉田玄白等ト小塚原腑分ヲ觀テ、同志ト力ヲ戮セ解體新書ヲ大成セリ。

先生蘭學ヲ以テ終身ノ業トナシ、彼邦ノ言語ニ通ジ其力ヲ以テ西洋ノ事態ヲ知ラントノ大望アリシ故ニ、世間浮華ノ人ト交ルコトヲ避ケ、戸ヲ閉デテ醫學ニ潛ムルコト終始一日ノ如クナリキ。晩年退隱シテ居宅ヲ根岸ノ貝塚ニ築キシガ病起ルニ及ビテ、女甥小島春庵ノ家ニ移リテ遂ニ歿ス、享年八十一、享和三年十月十七日ナリ。先生出デテ藩侯ニ侍セルトキ、藩主先生ヲ目シテ和蘭ノ化物ト云ヒテ、其名ヲ呼バレシコトナカリケレバ遂ニ蘭化ト稱セリ。

著ス所ニ蘭譯大成、和蘭譯文略、蘭譯筌、助語參考、蘭語隨筆、古言考、點例考、思々末通、駁庸醫管蠡秘言、仁言私說、八種字考、慧星考、輿地圖篇、地學通、魯西亞本紀略、同大統略記、樂山堂記等アリ。

第七十一　和田東郭

名ハ璞、字ハ韞卿、一字泰純、東郭ハ其號ニシテ、一ニ含章齋ト號ス。少ウシテ大阪ニ遊ビ戸田旭山ニ業ヲ受ケ、後京都ニ來リ吉益東洞ノ門ニ入リ古方ヲ修ム。寛政九年御醫トナリ、法橋ニ敍セラレ、十一年法眼ニ進ミ、享和三年病デ歿ス。

著ス所ニ、傷寒正文、解蕉窓方意、解蕉窓雜話、產家璚言、導水璚言、瘡家璚言、幼家璚言、青囊璚言、徵痘一家言、東郭雜記アリ。

第七十二　柚木太淳

字ハ仲素、鶴橋ト號ス。江州ノ人、江村北海ニ經書ヲ承ケ、家學ヲ嗣イデ醫トナリ、父ト共ニ眼科ヲ以テ立テリ。又荻野臺州ニ就キ內科ヲ修ム、解剖ニ志シ、解體瑣言ヲ著セリ。享和三年二月十八日歿ス。

第七十三　橘　元　周

鐵藏ト通稱シ、字ハ元周、梅園ト號ス。本姓吉田氏、延享二年橘元德ノ養嗣トナル。寶曆八年十月十五日法眼ニ進ミ、幕府奥醫師トナル。寬政年間ニ歿ス。

著ス所ニ、脚氣說アリ。

第七十四　畑　黄山

名ハ惟和、字ハ厚生、黄山ト號ス。平安ノ人、本姓安藤ナリ。醫官畑柳景養フテ嗣トナス、因テ畑氏ヲ冒ス。弱齡ニシテ醫ヲ以テ京都ニ鳴ル。延享二年十月法橋ニ敍セラレ、寶曆七年十二月法眼ニ進ム、明和四年八月詔ヲ奉ジテ太上天皇ノ病ヲ診シ、遂ニ侍醫トナル。安永五年初メテ御脈ヲ診シ、上皇ノ起居ヲ候フ、天明七年一月尙藥奉御トナリ法印ニ敍シ醫學院ノ號ヲ賜ハル。近衞街ニ新ニ學館ヲ營ミ醫學院ト名ケ、弟子ヲ誘進シ、又儒士ヲ延テ六經四書ヲ講ゼシム。天明八年京都火アリ乘輿ニ扈從シ行宮ニ宿直スルコト三年、享和ノ初メ劇疾ヲ患フ已ニ愈ルニ及ビ特旨短袴ヲ著セシメ、又杖朝ヲ許サル、且ツ故アルニ非ザレバ召サレズ。文化元年五月十六日歿ス、年八十四。

著ス所ニ斥醫斷學範アリ。